

2025

10月-12月

Vol. 101 No.4

安息日聖書教科



パート4

ヨハネによる福音 からの教訓

目次

1. イエス、アンナスとカヤパの前で	5
2. イスカリオテのユダ	10
3. ピラトの前でのイエス	15
4. ヘロデの前でのイエス	20
5. イエスがむち打たれ、有罪を宣告される	26
6. カルバリー	31
7. イエスの埋葬と復活	36
8. イエスが弟子たちに姿を現す	41
9. 品性における変化	46
10. 愛された弟子	52
11. 偉大な任務	57
12. 実質的な遠征	62
13. 魂の収穫を歓迎する	67

セブンスデーアドベンチス
ト改革運動世界總會安息
日学 校 部 (P.O.Box 7240
Roanoke, Virginia 24019-
0240, U.S.A)

安 息 日 聖 書 教 科
Vol.101, No.4

編集&発行:
S D A改革運動日本ミッション

〒 368 - 0071
埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保
1607 - 1

TEL : (0494) 22-0465

URL :
<http://www.4angels.jp>

E-mail:
sdarm.shomaru@gmail.
com

イ ラ ス ト : Adobe Stock
on pp. 4, 25, 72; Map
Resources on pp. 4, 51, 72;
Sermonview on the front
cover.

安息日聖書教科は、他のコメントをいっさい加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。引用文は、簡潔で直接的な見解を提供するために、可能なかぎり短くされています。ある部分では、明瞭さや、適切な前後関係、また読みやすさのために〔 〕の括弧が使われています。抜粋されている原文をさらに研究することをぜひともお勧めします。

まえがき

わたしたちがヨハネによる福音からの教訓のシリーズを完結するにあたり、終わりの場面、すなわちキリストの地上生活の最後の一週間に入ります。ヨハネの福音全体の半分近くが、この期間のために用いられています。ヨハネは、「他の何にもまして、キリストとの友情を喜んだように見える」（きよめられた生涯 53）。この緊密さをもって、救い主の犠牲に対する使徒の考察は、大いなる深みへと進みます。

主の昇天に続いて、ついに「ヨハネは、信仰を試みられるためにローマに呼び出された。その当局者たちの前で、使徒の教理は誤って述べられた。偽りの証人たちは、扇動的な異端を教えているとして彼を告訴した。こうした告訴によって敵はこの弟子を死刑にしたいと願った。

ヨハネは明瞭に、説得力を持って弁明した。しかも非常に単純、率直であつたので、彼の言葉には力強い効果があつた。聞く者たちは彼の知恵と雄弁に驚いた。しかし彼のあかしに説得力があればあるほど、反対者たちの憎しみは深まった。ドミティアヌス皇帝は激怒した。彼はキリストの忠実な支持者ヨハネの論法を論駁することも、ヨハネが真理を語るときに伴った力に対抗することもできなかった。それでも彼は、必ずヨハネの声を沈黙させようと決意した。

ヨハネは煮えたぎる油の大がまの中に投げ込まれた。しかし主は、燃えさかる炉の中の三人のヘブル人を守られたように、この忠実なしもべのいのちを守られた。こうして欺瞞者ナザレのイエス・キリストを信じる者たちはみな滅びるとの言葉が語られたとき、ヨハネは、わたしの主は、サタンとその天使たちが主を辱め苦しめようと計るすべてのことを、辛抱強く受けられるのであると、言明した。キリストは世を救うために命をささげられた。わたしは主のみわぎのために苦しむことを許され、光栄である。わたしは弱く、罪深い者であるが、キリストはきよく、罪のない、純潔なかたであつた。主は罪を犯さず、語られることばにも悪意は見られなかった。

これらの言葉には影響力があつた。ヨハネは、彼を大がまに投げ込んだ同じ男たちによって、大がまから出された。」（患難から栄光へ下巻 272, 273）

愛されたヨハネが経験したような勝利に満ちたクリスチャン生涯は、今日、わたしたちにとっても可能です。わたしたちは、「キリストの一生について毎日瞑想する時間を持つがよい。イエスの一生の要点を一つ一つとらえ、各場面、ことに最後の場面を想像のうちにとらえるべきである。このようにして、われわれのために払われたイエスの大犠牲を心に思いめぐらすとき、キリストに対するわれわれの信頼はもっと堅固になり、われわれの愛はめぎめぎせられ、われわれはもっと深くキリストの精神を吹きこまれる。もし最後に救われたければ、われわれは十字架のもとで悔い改め、心がくだかれることについて教訓を学ばねばならない。」（各時代の希望上巻 80）

わたしたちが尊い贖い主の地上生涯のこれらの終わりの場面を瞑想するときに、聖霊がわたしたちの心と思いを導いてくださいますように！

世界総会安息日学校支部

第一安息日献金 南アフリカのレソト・ミッション

レソトは南アフリカの地理的領域内にある小さな内陸国ですが、1822 年に独立した国家として建国されました。この地域は山が多く、独特の気象パターンがあり、冬は非常に寒く、雪が降ることもよくあります。

人口約 230 万人のうち、49%以上がローマ・カトリック教徒であり、次いで様々なキリスト教および非キリスト教の信仰を持つ人々がいます。2021 年、ジンバブエ出身の宣教師によってレソトに SDA 改革運動が導入されました。彼らは母国からレソトへ行き来し、西部の都市マセルとマフエテングの人々にメッセージを伝え、聖書に示された第四条を守るという呼びかけに応えています。



600 人以上の人々に伝道活動を行い、安息日についての理解を深め、そのうち 259 人が教会に通っています。2023 年 4 月、神の恵みにより、これらのアウトリーチ活動の最初の成果として 14 人がバプテスマを受けました。教会は現在、この国で登録され、正式に活動しています。

教会はこれまで自宅や賃貸アパートで活動してきたため、礼拝堂の需要が非常に高まっています。私たちの最大の課題は、この国が深刻な失業問題に悩まされ、信徒が働いていないこと、そして国民が独自の文化習慣に深く根ざしていることです。

そこで、世界中のすべての兄弟たちに、次のことに対して親切な援助の手を差し伸べてくださるよう伏してお願いいたします。

- ・ 訪問者や求道者に光を輝かせるために、一画の土地を買い、慎ましい事務室のついた礼拝堂を建設すること

- ・ 青年たちを支援する学校を設立すること。悲しいことにレソトには資金的に不利な状況にあつて学校を中断することになり、何もしていない 10 代の子供たちが多くいます。

- ・ キャンプミーティングをするためのテントと椅子を購入すること
- ・ 魂をわたしたちの集会に連れて行くための 18 人乗りのバンを確保すること
- ・ 文書を印刷するプレス機を購入すること

聖霊に心に触れていただいた人々が、遠近より、老若男女、惜しみなくこの特別な必要のために捧げてくださいますように。神は間違いなく彼らの懐を再び満たしてくださるでしょう。

主が引き続き、あなたがこの地における礼拝堂と伝道事業に心から捧げて下さるのに先立って祝福してくださいますように。

レソトからの皆さんの兄弟姉妹より

イエス、アンナスとカヤパの前で

暗唱聖句：「彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった。」(イザヤ書 53:7)

「キリストは衰えも、落胆もされなかった。キリストに従う者たちはこれと同じ持久のある信仰をあらわすのである。彼らはキリストが生活されたように生活し、キリストが働かれたように働くのである。なぜなら彼らは、キリストを大いなる監督としてたよっているからである。」(各時代の希望下巻 170)

推奨文献： 各時代の希望下巻 191-214

1. ユダヤ人の役人たちの前で

日/9月28日

- a. ゲッセマネで逮捕された後、イエスは誰の前に暴力的に連れていかれましたか(ヨハネによる福音書 18:12-14; マタイによる福音書 26:57)。

「アンナスは現職の祭司一族の長で、その老齢に対する敬意から、大祭司として認められていた。人々は彼の助言を求め、神の声としてそれを実行した。彼がまず第一に、祭司の権力への捕虜としてイエスを見なければならぬ。彼より経験の浅いカヤパが彼らの意図している目的を達成しそこなうことがないように、彼がこの囚人の審問に立ち会わねばならぬ。彼の策略、狡猾さ、陰険さがこの機会に利用されねばならぬ。」(各時代の希望下巻 191)

- b. どの弟子たちがキリストの裁判を遠くから見守ったでしょうか(ヨハネによる福音書 18:15)。

「園で主を見捨ててから、弟子たちの中の二人が、イエスを引き立てて行く群衆のあとから、間隔をおいてついて行った。この弟子たちはペテロとヨハネであった。祭司たちは、ヨハネがイエスの有名な弟子であることを知っていたので、彼が先生の屈辱を目撃したらこんな人を神のみ子として信じていたことを馬鹿らしく思うようになるだろうと希望して、法廷の中へ入れてくれた。ヨハネがペテロのために話を付けてくれたので、ペテロもまた中にはいることができた。」(同上 206)

- a. ペテロはどこに自分の身を置きましたか（ヨハネによる福音書 18:16, 18）。

「弟子たちの中には、大胆にイエスのおられる場所へはいり、さばきの光景を見た者たちがいた。彼らは、イエスが天来の能力をあらわして、敵たちの手からご自身を救い出し、残虐な仕打ちをした敵をこらしめられることを期待した。…弟子たちは、イエスが死なれるとは信じるができなかった。彼らは、イエスが力をもって立ち上がり、ちょうど彼が神殿にはいられたときに、神の家を商売の場所としていた連中を追い出し、彼らが一団の兵士にでも追跡されるかのようにイエスの前から逃げ出したあの時のように、いまこの血にうえた群衆を、威厳のある声で追い散らされるように望んだ。弟子たちは、イエスが力をあらわして、ご自分がイスラエルの王であることを、みんなにさとらせられるように望んだ。」（初代文集 292, 293）

「中庭では火を燃やしていた。ちょうど夜明け前で、夜の一番寒い時刻だったからである。一団の人々が火のまわりに集まっていたので、ペテロは無遠慮に彼らの中に加わった。彼はイエスの弟子であることに気づかれなくなかった。何気なく群衆の中にまじっていることによって、彼は、自分がイエスを法廷に引き連れてきた人々の仲間だと思われるように望んだ。」（各時代の希望下巻 206）

- b. どのようにペテロは自分の主を拒みましたか（ヨハネによる福音書 18:17, 25-27; ルカによる福音書 22:56-60）。

「ペテロは、イエスが売り渡されてからも、その後について行った。彼は、人々がイエスをどうしようとするのか見たかった。しかしペテロは、イエスの弟子のひとりであることをとがめられると、身の安全を計るために、自分はその男を知らないと言断した。」（初代文集 290）

「ペテロは 自分の正体を知られないようにくふうしていた。彼は無関心な風をよそおって、敵の陣地に身を置いたので、たちまち誘惑のとりこになった。もし主のために戦うように召されたのだったら、彼は勇敢な戦士だっただろう。しかし嘲笑の指が自分に向けられた時、彼は臆病者であることをばくろした。主のために活動的に戦うことにはしりごみしないのに、嘲笑に負けて信仰を否定する人が多い。避けねばならないものとまじわることによって、彼らは自分自身を誘惑の道に置く。彼らは誘惑するように敵を招いて、ほかの事情のもとでは決して罪を犯さないようなことを、言ったりしたりする。今日、苦難や非難を恐れて信仰を偽装するキリストの弟子は、法廷におけるペテロの場合のように、主をこぼむのである。」（各時代の希望下巻 207）

- a. 三度、主を拒み鶏の鳴き声を聞いた後、ペテロは何を思い出し、また彼は何をしましたか（マタイによる福音書 26:75; マルコによる福音書 14:72）。

「この下等な誓いのことばを出したペテロの舌の根がまだかわかないうちに、そしてにわたりのかん高い鳴き声がまだ彼の耳にひびいていた時に、救い主はしかめつらの裁判官たちの前からふり向いてこのあわれな弟子をまともにごらんになった。同時にペテロの目は主にひきつけられた。そのやさしい顔つきのうちにペテロは深いあわれみと悲しみとを読んだが、怒りのかげはなかった。

青ざめた苦難の顔、ふるえる唇、あわれみとゆるしの顔つき、—そうした光景がペテロの心を矢のように刺し通した。良心がめざめ、記憶がよみがえった。ほんの二、三時間前に自分は主といっしょに獄までも死までも行きますと言った約束が思い出された。救い主が二階座敷で、彼がその夜主を三回こぼむであろうと言われたときの悲しみを彼は思い出した。ペテロはイエスを知らないと言ったばかりだったが、いま激しい悲しみのうちに、主が自分をこんなにもよく知っておられ、こんなにも正確に自分の心と、自分自身も知らなかった虚偽を読み取っておられたことに気がついた。」（各時代の希望下巻 208-210）

- b. 屈辱を受けた弟子はどこへ行きましたか（ルカによる福音書 22:62）。彼の大きな罪の原因は何だったのでしょうか。

「ペテロは、孤独と暗黒のうちに道を急いだが、どこへ行くのかわからず、またどこへ行こうとかまわなかった。ついに彼は自分がゲッセマネにいることに気がついた。二、三時間前の光景が彼の心にまざまざとよみがえった。血の汗にまみれ、苦悩にけいれんしていた主の苦難のお顔が彼の前に浮かびあがった。彼は主がただひとりで祈りのうちに泣き苦しんでおられた時、一方ではその試練の時間に主といっしょに苦しむべき者たちが眠っていたことを、激しい後悔とともに思い出した。

イエスが目をさまして祈りなさいと命じられたのに眠っていた時、ペテロはこの大きな罪に対して道を備えていた。弟子たちはみな、あの危機の時に眠ったことによって、大きな損失をこうむった。キリストは、彼らが経験しなければならぬ激しい試練をご存じだった。試練に対する彼らの備えができないように、サタンが彼らの感覚を麻痺させようと働くのをイエスは知っておられた。そこでイエスは彼らに警告をお与えになったのである。園にいた時間に、目をさまして祈っていたら、ペテロは自分自身の弱い力にたよるがままに放っておかれなかったであろう。彼は主をこぼむようなことをしなかったであろう。」（同上 210, 211）

- a. アンナスはイエスにどのような質問をしましたか (ヨハネによる福音書 18:19)。

「もし治安を妨害する者として告発できたら、ローマ人によって〔キリスト〕を有罪に定めることができる。アンナスはこの第二の告発をまず確定しようと試みた。彼は、この囚人が手がかりとなるような材料を何かしゃべってくれるように望みながら、弟子たちとイエスの教理について質問した。アンナスはイエスが新しい王国を建設する目的で秘密結社を組織しようとしているということを証拠だてるような陳述を引き出そうと考えた。そうすれば、祭司たちはイエスを治安妨害者また反乱扇動者としてローマ人に引き渡すことができるのだった。」(各時代の希望下巻 192)

- b. イエスが耐え忍ばれた忍耐の試練を説明しなさい (ヨハネによる福音書 18:20-23; イザヤ書 53:7)。

「アンナスはこの決定的な答に沈黙させられた。……役人の一人は、アンナスが沈黙させられたのを見て怒りに満ち、イエスの顔を打って『大祭司にむかって、そのような答をするのか』と言った (ヨハネ 18:22)。……

イエスは報復的な激しいことばを出されなかった。その冷静な答は、挑発されることのない潔白で忍耐強くやさしい心から出たのであった。

キリストは乱暴と侮辱に鋭く心を痛められた。ご自分が作られた人間、しかも無限の犠牲を払おうとしておられる相手の人間の手で、キリストはあらゆる侮辱を受けられた。キリストの苦しみは、ご自分の聖潔の完全さと罪に対する憎しみに比例していた。悪鬼のようにふるまう人たちによって裁判されることはキリストにとってたえない苦痛であった。サタンの支配下にある人間どもにとりこまれていたことは、キリストにとって心の底から不快な思いであった。神の権力をひらめかせさえすれば、一瞬間にこの残酷な迫害者たちを打ち倒すことができることを、キリストは知っておられた。それだけに裁判は一層耐えがたいものであった。

ユダヤ人は外面的なしるしをもって現われるメシヤを待ち望んでいた。彼らは、キリストが、ちょっとした威圧的な意思だけで人々の思想の流れを変え、いやおうなしにご自分の主権を認めさせられるものと期待した。このように彼らは、キリストが権力を保持し、彼らの野心的な望みを満足させられるものと信じた。だからキリストが侮辱的な仕打ちを受けられたとき、神性を発揮するようにとの強い試みがイエスにのぞんだ。ひとことばで、あるいはひと目で、キリストは、ご自分が王たちと役人たち、あるいは祭司たちと宮にまさるおかたであることを、迫害者たちに告白させることがおできになるのである。しかしご自分がえらばれたその立場をひとりの人間として守ることがキリストの困難な仕事であった。」(同上 194, 195)

5. 自らの正体を明らかにしたために有罪を宣告される 木 / 10月2日

- a. イエスを非難する決定的な証拠が見つからなかったため、カヤパは救い主にどのような質問をしましたか (マタイによる福音書 26:63)。
- b. カヤパに対するキリストの答えは何でしたか、またこの答えはどのようにこのお方に対する証拠とされたのでしょうか (マタイによる福音書 26:64-66)。

「ついにカヤパは、右手を天に向かってあげ、厳粛な宣誓の形式で、イエスに問いかけた、『あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ』 (マタイ 26:63)。

この訴えに対して、キリストはだまっていられなかった。沈黙すべき時があるとともに、語るべき時があった。イエスは直接問いかけられるまでは口を開かれなかった。いま答えることによってご自分の死が確定することをイエスは承知しておられた。しかしいま国民から最高の権威を認められた者によって、いと高き神のみ名のもとに、訴えがなされたのである。キリストは法に対して正しい尊重心を示さないようなことはされなかった。それよりも、ご自身と天父との関係が問題にされたのである。イエスはご自分の性格と使命をはっきり宣言されなければならない。イエスは弟子たちに『人の前でわたしを受けいれる者を、わたしもまた、天にいますわたしの父の前で受けいれるであろう』と言われたことがあった (マタイ 10:32)。いまイエスは、ご自身の模範によって、この教えをくりかえされた。

イエスが、『あなたの言うとおりである』と答えられたとき、だれもがみな耳をそばだてて、目をイエスのお顔にじっとそそいだ。そしてイエスが『しかし、わたしは言うておく。あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう』とつけ加えられたとき、その青ざめた顔を天の光が照らしたようにみえた (マタイ 26:64)。」 (各時代の希望下巻 200, 201)

個人的な復習問題

金 / 10月3日

1. 主を拒むことを避けるために、わたしはどのような誘惑に抵抗すべきでしょうか。
2. 自分の信仰を隠すことでどのような罪を犯すことになるのでしょうか。
3. わたしはペテロのように、真の悔い改めの意味を十分に理解しているでしょうか。
4. アンナスとイエスの間の対話を説明しなさい。
5. カヤパに対するキリストの答えの中にどのような預言が含まれていましたか。

イスカリオテのユダ

暗唱聖句：「イエスは彼らに答えられた、『あなたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それなのに、あなたがたのうちのひとは悪魔である。』これは、イスカリオテのシモンの子ユダをさして言われたのである。このユダは、十二弟子のひとりでありながら、イエスを裏切ろうとしていた。」(ヨハネ福音書 6:70, 71)

「〔ユダは〕キリストに仕える立場を受け入れながら、一方では天来の型にはまろうとしなかった。彼は自分自身の判断と意見を持っていたともよいと考え、批判と非難の精神を育てた。」(各時代の希望下巻 216)

推奨文献： 各時代の希望下巻 215-226

1. 最初の接触

日/10月5日

a. ユダはイエスのお働きの初めにどのように出会いましたか、また何が彼を主に引き付けたのでしょうか(マタイによる福音書 8:19)。

「イエスが弟子たちを按手礼のために準備しておられたとき、召されていないのに仲間に加わりたいたと強要した者があった。それはイスカリオテのユダという男で、自らキリストの弟子と名乗っていた。いま彼はやってきて、弟子たちの仲間に入れてもらいたいとしたのだ。」(各時代の希望上巻 378, 379)

「ユダが弟子たちに加わったのは、多くの人々がキリストに従っている時であった。救い主の教えは、会堂や海辺や山上で語られる主のことばにうっとりと聞き入っている彼らの心を動かした。ユダは病人や不具者や盲人たちが町々や都市からイエスのもとに群がり集まってくるのを見た。彼は、瀕(ひん)死の病人がイエスの足下に置かれるのを見た。彼は、救い主が病人をいやし、悪鬼を追い出し、死人をよみがえらせられた偉大なみわざを目に見た。彼は、自らキリストの力の証拠を感じた。彼は、キリストの教えがこれまで聞いたどんな教えよりもすぐれていることに気づいた。彼は、この大教師を愛し、いっしょにいたいと望んだ。彼は、品性と生活を変えたいという願いを感じ、イエスと関係することによってこのような経験をもちたいと望んだ。」(同上下巻 216)

2. 使徒職に受け入れられる

月/10月6日

- a. ユダが12使徒の一人としての地位に就きたいと提案した時、イエスはどのように応じられましたか、また他の弟子たちの反応はどうでしたか（マタイによる福音書 8:20）。

「ユダは、イエスがメシヤであると信じた。そして使徒たちに加わることによって、新しい王国の高い地位を占めようと望んだ。イエスは、ご自分の貧しさを語ることによって、この望みをたち切ろうと考えられた。

弟子たちは、ぜひユダに仲間の一人になってもらいたいと望んだ。ユダは、堂々たる外見をそなえ、鋭い洞察力と実行力を持った男だったので、弟子たちは、イエスの働きに大きな助けになる人物として、彼をイエスに推薦した。彼らは、イエスがこんなに冷淡にユダに対応されるのを見て驚いた。

弟子たちは、イエスがイスラエルの指導者たちの協力を求めようとされないのが、非常に失望していた。こうした有力な人たちの支持を得て、キリストの働きを強化しようとならないのはまちがっていると、彼らは思った。もしイエスがユダを拒絶されたら、弟子たちは、心の中で、主の知恵を疑ったことだろう。その後のユダの経歴は、神の働きに適する人物かどうかを決定するのに世俗的な考慮を重んじることが、危険であることを弟子たちに示すことになった。弟子たちが熱心に望んだような人々に協力してもらうことは、その働きを最悪の敵の手に売り渡すことになったであろう。」（各時代の希望上巻 379）

- b. 使徒としてのユダに関して何と書かれていますか（マタイによる福音書 10:2-4; ヨハネによる福音書 6:64）。

「救い主はユダを拒否されなかった。主は彼を十二人の中にお入れになった。主はユダが伝道者としての働きをするものと信頼された。主は、病人をいやし悪鬼を追いつく力をユダにおさづけになった。しかしユダはキリストにまったく従いきるところまで行かなかった。彼は世俗的な野心や金銭欲を放棄しなかった。キリストに仕える立場を受け入れながら、一方では天来の型にはまろうとしなかった。彼は自分自身の判断と意見を持っていたとしてもよいと考え、批判と非難の精神を育てた。」（各時代の希望上巻 216）

- c. 裏切りはどのように予見されていましたか（ヨハネによる福音書 6:70, 71; 13:9, 10; 詩篇 41:9）。

- a. 弟子たちの間で描かれていたユダの印象と、彼の本当の動機と品性の違いを述べなさい (ヨハネによる福音書 12:6)。

「ユダは弟子たちから非常に尊敬され、彼らに対して大きな影響力を持っていた。彼自身も自分の資格を高く評価し、兄弟たちが判断力においても能力においても自分よりずっと劣っているとみなしていた。この人たちは機会を見てそのチャンスを利用することのできない人たちだと、彼は考えた。見通しのきかないこんな人たちを指導者にしていたら教会は決して繁栄しないだろうと、考えた。ペテロは、衝動的で、前後の考えなく行動する人間だった。ヨハネは、キリストの口から出る真理を大事にしているが、ユダから見れば金のやりくりはへただった。マタイは、自分の受けた訓練から万事に正確でなければならないことを教えられていたので、正直という点に非常にやかましかった。そしてユダからみれば、彼はたえずキリストのみことばを瞑想し、それに心を奪われていたので、抜け目なく先のことまで考えなくてはならない事業をまかせることはできなかった。このようにユダは弟子たちを全部かぞえあげてみて、もし事務的な才能のある自分がいなかったら、教会はしばしば困難と混乱に陥るだろうとうぬぼれた。ユダは自分がだれにもだまされない有能な人間であると考えた。彼は自分こそみわざにとって誉れとなるべき人間であると自己評価し、いつもそのように言いふらしていた。……

彼の手に渡されるわずかな金銭がたえず誘惑となった。キリストのためにすこしばかり奉仕したり、宗教的な目的のために時間をささげたりすると、彼はしばしばそのとばしい資金の中から自分自身に支払った。彼自身の目には、そうした口実が自分の行為の言いわけになった。だが神の御目には、彼はどろぼうであつた。」(各時代の希望下巻 217, 218)

- b. ユダの品性が公に表されたのは具体的にどのような時でしたか (ヨハネによる福音書 12:3-5; マタイによる福音書 26:14-16)。どのようにイエスは彼を助けようとなさいましたか。

「ユダは自分自身の品性の弱さに盲目だったので、キリストは、ユダが自分の欠点に気づいて直す機会のある立場に彼を置かれた。弟子たちの会計係として、彼はこの小さな群れの必要に備え、また貧しい人々が困っているのを助ける立場に召された。……ほかの人たちに仕えることによって、ユダは無我の精神を養うことができたのだった。しかしユダは、毎日キリストの教訓を聞き、その無我の生活を目に見ながら、貪欲な性質をほしいままにしていた。」(同上)

4. ユダのためになされたキリストの働き

水/10月8日

- a. キリストはどのようにして貪欲な使徒に訴えようとなさいましたか（ヨハネによる福音書 12:7, 8）。

「救い主はユダの心をお読みになり、ユダが神の恵みによって救われなければ不義の深みに沈んでしまうことをご存じだった。この男をご自分に結びつけることによって、イエスは、ご自身のわきあふれる無私の愛に日々ふれることのできることに彼を置かれた。もしユダが心をキリストに向かって開くなら、神の恵みは利己主義という悪鬼を追い出し、たとえユダでも神のみ国の住民となるかもしれない。

もし人々が訓練され、神について学ぶなら、神は彼らを人間的な要素のある品性のままに受け入れて、神のご用のために彼らを養成される。彼らは完全な人間だから選ばれるのではなくて、不完全な人間であるにもかかわらず、真理を知りこれを実行することにより、またキリストの恵みによって、神のみかたちに変えられる者となるために選ばれるのである。

ユダは、ほかの弟子たちと同じように機会があった。彼は、同じとうい教訓を聞いた。しかしキリストが要求された真理の実行は、ユダの心の思いや目的とくいちがっていたので、彼は、神からの知恵をうけるために、自分の考えを放棄しようとしなかった。」（各時代の希望上巻 380）

- b. わたしたちの良い羊飼いがユダに対して実証なさった牧者的な品性を述べなさい（詩篇 77:9; 86:15）。

「救い主は、ご自分を売り渡す者となるこの男を、どんなにやさしくとり扱われたことだろう。イエスは、ご自分の教えを通して、貪欲な心を根絶する慈善の原則についてこんこんとさされた。イエスは、ユダの前に貪欲という憎むべき性格をお示しになった。この弟子は自分の性格が描写され、自分の罪が指摘されているのを幾度もみとめたが、自分の不義を告白してこれを捨てようとしなかった。彼は自分に満足していたので、誘惑に抵抗しないで、その不正な行為をつづけた。キリストは、彼の目の前にあつて生きた模範となり、もし彼が天来の仲保と奉仕による益を受けるなら、どんな者になり得るかをお示しになったが、どの教訓もどの教訓もユダの耳には無関心に聞き流された。

イエスは、ユダの貪欲を鋭いことばで譴責されないで、開かれた本を読むようにユダの心を読んでおられる証拠を示されたときでも、天来の忍耐力をもって、このあやまちを犯している男を忍ばれた。イエスは、彼の前に正しい行為の最高の動機をお示しになった。ユダが天の神の光をしりぞけるなら、彼はもはや弁解の余地がないのである。」（同上 380, 381）

5. 最終的な行動

木/10月9日

- a. イエスがユダのために最後の努力をなされたのいつでしたか、そしてこの残念な使徒は最終的に何をしましたか (ヨハネによる福音書 13:1-5, 10-14; 18:2-5)。

「暴徒たちが園にはいつてきたとき、ユダは先頭に立ち、すぐうしろに祭司長がつづいていた。……イエスのすぐそばまでくると、彼は親しい友としてイエスの手をとる。そして『先生、いかがですか』ということばとともに、イエスに接吻をくりかえし、危機にあるイエスに同情しているかのように、泣き出しそうにみえる。

イエスは彼に『友よ、なんのためにきたのか』と言われた。そして、『ユダ、あなたは接吻をもって人の子を裏切るのか』とつけ加えられたとき、イエスの声は悲しみにうちふるえた (ルカ 22:48)。この訴えは裏切り者の良心をめぐめさせ、そのかたくなな心を動かすべきだった。しかし彼は、名誉、誠実、人間的なやさしさから見放されていた。」(各時代の希望下巻 186, 187)

- b. ユダの最終的な結末を述べなさい (マタイによる福音書 27:3-10)。

「〔ユダ〕は裁判長の席に走りよると、主を売り渡した代価である銀三十枚を大祭司の前に投げた。そして、カヤパの衣を力いっぱいにつかみながら、イエスは死に値するようなことは何もしなかったのだと断言して、その釈放を嘆願した。……

その同じ日の遅くに、ピラトの法廷からカルバリーへの途中、イエスを十字架の処刑場へ引っ張って行く邪悪な群衆の喚声と嘲笑がとどえた。人目につかない寂しい場所を通り過ぎたとき、彼らは枯れた木の根もとにユダの死体を見たのである。それは目をそむけたいような光景であった。ユダが木につるして首をつったひもは、からだの重みで切れていた。彼のからだは落ちて無惨につぶれ、犬どもがいまそれをむさぼり食べていた。」(同上 224, 226)

個人的な復習問題

金/10月10日

1. ユダの内面的な弱さを観察することによって、わたしはどのような警告を受けるべきなのでしょうか。
2. もしわたしが彼のように心をかたくなにするならば、わたしにはどのような累積的な危険が生じますか。
3. わたしの魂に対するキリストの心からの切なる願いをどのように正しく理解することができますか。
4. ユダが十二使徒の間に座を占めようとした動機は何でしたか。
5. ユダの最大の弱点は何でしたか。

ピラトの前でのイエス

暗唱聖句：「ピラトはイエスに言った、『真理とは何か』。こう言って、彼はまたユダヤ人の所に出て行き、彼らに言った、『わたしには、この人になんの罪も見いだせない。』」（ヨハネによる福音書 18:38）

「ピラトはイエスを護衛している人たちを見、それからさぐるような目つきをじっとイエスにそそいだ。……彼は、その顔つきに犯罪人の特徴ではなく、天の特性があらわれているおだやかで、威厳のある態度の人を見た。」（各時代の希望下巻 228）

推奨文献： 各時代の希望下巻 227-256

1. 一人からもう一人へ

日 / 10 月 12 日

- a. ユダヤ人たちは次にイエスをどこへ連れて行きましたか（マルコによる福音書 15:1; ヨハネによる福音書 18:28（上句））。

「ローマ人総督ピラトの法廷に、キリストは、囚人として拘束されて立たれる。イエスのまわりには警備の兵士たちが立ち、法廷は見物人でたちまちいっぱいになる。入口のすぐ外側には、サンヒドリンの裁判官たち、祭司たち、役人たち、長老たち、それにやじ馬連中がいる。

イエスを有罪に定めてから、サンヒドリンの会議は、その判決の確認と執行をピラトに願い出ていた。」（各時代の希望下巻 227）

- b. ユダヤ人の指導者たちの偽善を説明しなさい（ヨハネによる福音書 18:28（下句））。

「これらのユダヤ人当局者たちは、ローマ人の法廷にはいろいろとしなかった。彼らの儀式的律法によれば、そうすることによって彼らはけがれ、したがって過越の食事に加わることはできないのであった。盲目的な彼らは、自分たちの心が殺人的な憎悪によってけがされていることに気づかなかった。キリストが真の過越の小羊であられるということ、そしてそのおかたをすてたからにはこの大いなる食事は彼らにとって何の意味もなさなくなっているということが、彼らにはわからなかった。」（同上）

- a. ピラトはユダヤ人の指導者たちにどのような当惑させる質問をしましたか(ヨハネによる福音書 18:29)。

「キリストの様子はピラトに好ましい印象を与えた。ピラトの性質のよい一面がめざめた。彼はこれまでイエスとその働きについて聞いていた。彼の妻は、このガリラヤの預言者がふしぎなわざを行なって、病人をいやしたり死人をよみがえらせたことなどをいくらか彼に話したことがあった。いまそのことが夢のようにピラトの心によみがえってきた。彼は二、三の方面から聞いたうわさを思い出した。彼はこの囚人に対する告発をユダヤ人自身にやらせようと決心した。

この男はだれか、あなたがたは何のためにこの男をつれてきたのか、この男に何の罪があると言うのか、とピラトは言った。ユダヤ人たちは当惑した。彼らはキリストに対する告発を証拠だてることができないことがわかっているのに、公開の尋問を望まなかった。」(各時代の希望下巻 228, 230)

- b. ユダヤ人の指導者たちはピラトにどのような傲慢で言い逃れの返答をしましたか(ヨハネによる福音書 18:30)。

「サンヒドリンを構成している人たち、すなわち国の最高の地位にある人たちが、死刑に値すると考えられる人間をあなたのところへつれてくるとき、その訴えについてどうしてたずねる必要があるか。彼らは、自分たちの重要性についての認識をピラトに印象づけ、それによって多くの予備尋問を経ないで、彼らの依頼に応じさせようと望んだ。彼らは自分たちの宣告を裁可してもらいたいと熱心に望んだ。キリストのふしぎなみわざを目撃した人たちが、いま彼らが並べたてているつくりごととは異なった話をするということが彼らは知っていたからである。」(同上 230)

- c. ピラトのどのような宣言が祭司たちの状況をさらに困難なものにしましたか(ヨハネによる福音書 18:31)。

「[祭司たち]は、キリストの有罪についてピラトが彼らのことばを信じてその宣告を執行してくれるようにとたのんだ。その結果については、自分たちが責任を負うというのだった。

ピラトは正しい、あるいは良心的な裁判官ではなかった。しかし道徳的な力は弱かったが、彼はこの願いを許可することをことわった。彼は、イエスに対する告発の理由が述べられないかぎり、有罪の宣告をくだそうとしなかった。」(同上 231)

- a. 裁判の法廷へ戻ると、ピラトはイエスにどのような質問をしましたか、またそれはなぜですか (ヨハネによる福音書 18:33)。

「祭司たちは苦境に陥った。彼らは自分たちの偽善を一番奥深いところへ隠さねばならないことを知っていた。キリストが宗教上の理由で捕えられたことをみせてはならなかった。これを理由として持ち出したら、彼らの訴えはピラトに何のききめもないであろう。イエスが一般の法律に反したことを行なっているようにみせねばならない。そうしたらイエスを政治犯として処罰できるであろう。ローマ人の統治に対する騒動や反乱がしじゅうユダヤ人の間に起こっていた。ローマ人は、…反乱をきびしく取りしまり、暴動になりそうなことはどんなことでも弾圧するようにたえず警戒していた。

〔ピラト〕は、この囚人が政府に対して陰謀をくわだてたということを信じなかった。イエスの柔和なへりくだった様子はこの告発にまったく不似合いだった。ユダヤ人の高官たちの邪魔になっているこの罪なき人間を滅ぼすために根深い陰謀がめくらされているということを、ピラトは確信した。

ピラトはイエスの態度に驚いた。この人は自分のいのちを救いたくないので裁判の進行を無視しているのだろうか、彼は心の中で問うてみた。報復もしないで侮辱と嘲りに耐えておられるイエスを見て、この人にはあのわめいている祭司たちのような不義や不正があるはずがないとピラトは感じた。」(各時代の希望下巻 231-234)

- b. イエスはピラトの質問にどのようにお答えになりましたか、またどのような反応を示しましたか (ヨハネによる福音書 18:34, 35)。

「イエスから真実を引き出し、群衆の騒ぎからのがれたいと望んで、ピラトは、イエスをかたわらに引きよせ、もう一度『あなたは、ユダヤ人の王であるか』とたずねた。

イエスはこの質問に直接お答えにならなかった。イエスは、聖霊がピラトと争っているのを知っておられたので、彼が自分の確信を認める機会をお与えになった。『あなたがそう言うのは、自分の考えからか、それともほかの人々が、わたしのことをあなたにそう言ったのか』とイエスはおたずねになった。すなわち、ピラトにそのような質問をさせたのは、祭司たちの訴えなのか、それともキリストから光を受けたいという望みなのかというのであった。ピラトはキリストの言われた意味を理解した。しかし彼の胸中に誇りがあたまをもたげた。彼は自分のうちにわきあがった確信を認めようとしなかった。」(同上 234)

- a. イエスはどのようにして地上歴史の終わりに至るまですべての人に理解されるべき、ご自分の王国の本質を明確にご説明になりましたか（ヨハネによる福音書 18:36）。

「しかし今日、宗教界には、自分たちが信じる通りに、キリストのみ国を、この地上に、現世の支配権をもった国として建設するために働いている人たちが大勢いる。彼らは主イエスを、この世の王国の主権者、世の法廷、軍隊、議会、王宮、市場の主権者にしたいと望むのである。彼らは、主が人間の権威によって施行される法律を通して統治されるのを期待する。キリストがいまみずからこの地上におられないので、彼らは、キリストの代理をつとめ、キリストのみ国の律法を施行しようとする。このような国を建設することは、ユダヤ人がキリストの時代に希望したことである。もしキリストが、現世の主権を確立され、彼らが神の律法とみなしているものを施行され、彼らを神のみこころの解説者とし、神の権威の代理人とされる気があったら、彼らはイエスを受け入れたのである。しかしキリストは、『わたしの国はこの世のものではない』と言われた（ヨハネ 18:36）。主はこの世の王座を受けようとされなかった。」（各時代の希望中巻 314, 315）

- b. キリストは地上にいるわたしたちに何を思い起こさせようとなさいましたか（マルコによる福音書 12:17）。

「イエスの在世当時の政治は墮落していて、圧制的であった。棄てておけない悪弊一搾取、偏狭、暴虐な残酷さがいたるところにみられた。それでも救い主は、社会改革を試みられなかった。主は国民の悪弊を攻撃したり、国民の敵を非難したりされなかった。主は、権力者たちの権威や行政に干渉されなかった。われわれの模範であられたおかたは、現世の政治から遠ざかっておられた。それは、主が人々の不幸に対して無関心であられたからではなく、これを救う方法がただ人間の外面的な手段にはなかったからである。効果があるためには、救済策は個人に及び、心を生まれかわらせねばならないのである。

キリストのみ国は、法廷や会議や立法議会などの決定や、世俗的に有力な人たちの後援によってではなく、聖霊の働きを通して、キリストの性質が人間性のうちにうえつけられることによって、建てられるのである。」（同上 315）

「教会と国家との結合は、たとえどんなにささいなものであっても、世俗を教会に近づけるように見えながら、実際は、教会を世俗に近づけることにほかならないのである。」（各時代の大争闘上巻 382）

5. 絶好の機会を逃す

木/10月16日

- a. イエスはどのようにピラトの良心に優しく訴えましたか（ヨハネによる福音書 18:37）。

「イエスは、〔ピラト〕にもっと光を与えないではおかれなかった。イエスはピラトの質問に直接お答えにはならなかったが、ご自分の使命をはっきり述べられた。イエスは、ご自分がこの世の王位を求めているのではないことを、ピラトに理解させられた。……

キリストは、ご自分のことばそのものが、それを受け入れる気持のある者にとっては神秘を解く鍵であることを肯定された。みことばはそれ自体にすばらしい力があって、これがキリストの真理のみ国を発展させる秘訣であった。イエスは、ピラトが真理を受け入れてそれを自分のものにするによってのみ彼の墮落した性質はつくり直されるのだということを理解するように望まれた。」（各時代の希望下巻 234, 235）

- b. ピラトはイエスにどのような深い質問をしましたか、しかしピラトがその答えに本当の関心がなかったことを何が示していますか（ヨハネによる福音書 18:38）。

「ピラトは真理を知りたいと願った。彼の心は混乱していた。彼は熱心に救い主のことばをとらえ、彼の心は、それが本当に何であるか、またどのようにしたらそれを自分のものにするかを知りたいとの熱望に動かされた。『真理とは何か』とピラトはたずねた。しかし彼は返事を待たなかった。外部の騒ぎが彼の関心を当面の問題に引きもどした。祭司たちが今すぐ判決をくだすようにわめき立てていたからである。ピラトはユダヤ人たちのところへ出て行くと、力をこめて、『わたしには、この人になんの罪も見いだせない』と宣言した。

異教の裁判官のこのことばは、救い主を訴えているイスラエルの役人たちの不誠実と虚偽に対する痛烈な譴責であった。」（同上 235, 236）

個人的な復習問題

金/10月17日

1. ユダヤ人のように、どのようにわたしも「汚れ」という概念を曲解してしまう危険があるのでしょうか。
2. ピラトのように、わたしはどのような状況で良心の声に抵抗しているかもしれませんか。
3. どのような圧力のもとで、わたしは真理に向き合うことを避けてしまう危険があるのでしょうか。
4. ユダヤ人はピラトに何を期待していたのでしょうか。
5. ピラトとイエスの間にあった会話を述べなさい。

ヘロデの前でのイエス

暗唱聖句：「キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。ののしられても、ののしかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである。」（ペテロの第一の手紙 2:22-24）

「この世におけるキリストの使命は、いたずらな好奇心を満足させることではなかった。主は、心の傷ついた者をいやすためにこられた。罪に悩む魂の傷をいやすために何かことばを語るのであったら、主はだまってはおられなかったであろう。しかしイエスは、真理をけがれた足で踏みつけることしかししないような者たちに対しては、何も言われることがなかった。」（各時代の希望下巻 239）

推奨文献： 初代文集 293-298

1. 問題を避けようとする

日 / 10月19日

- a. ピラトはキリストの有罪判決の責任を逃れようとして何をしましたか（ルカによる福音書 23:5-7）。

「〔祭司と長老たち〕は大声でピラトを攻撃し、ローマ政府から譴責されるぞといっておどした。彼らは、ピラトがイエスの有罪をこぼんだことを非難し、イエスはカイザルに反対して立ちあがった人間なのだと断言した。

ピラトは、この時、イエスを有罪に定めようとは思っていなかった。ユダヤ人が憎悪と偏見からイエスを訴えたことが彼にはわかっていた。彼は自分の義務が何であるかを知っていた。正義はキリストを直ちに釈放することを要求した。しかしピラトは民衆の悪意を恐れた。イエスを彼らの手に渡すことをこぼめば、騒動がもちあがるであろう。彼はそのような騒ぎにまきこまれることを恐れた。ピラトは、キリストがガリラヤの出身だと聞くと、その地方の領主ヘロデがちょうどエルサレムにきていたので、キリストを彼のもとに送ることにきめた。この手順によって、ピラトは、裁判の責任を自分からヘロデへ移そうと思った。彼はまたこのことを、自分とヘロデとの昔のけんかを和解するよい機会だと考えた。そして実際その通りになったのであった。この二人の行政長官は救い主の裁判をめぐって親しくなった。」（各時代の希望下巻 236）

- a. ヘロデはイエスに会ってどのように感じましたか、またこのお方を見た時、何を考えましたか（ルカによる福音書 23:8）。

「このヘロデは、バプテスマのヨハネの血で手をけがしたヘロデである。ヘロデは、初めてイエスのことを聞いたとき、恐怖におそわれて、『わたしが首を切ったあのヨハネがよみがえったのだ』。『それで、あのような力が彼のうちに働いているのだ』と言った（マルコ 6:16、マタイ 14:2）。それでもヘロデはイエスに会いたいと望んだ。いまこの預言者のいのちを救う機会がきたのだ。そこで王は、血にまみれた首を大皿にのせて持ってこられたあの記憶を永久に心の中から追い払いたいと望んだ。彼はまた自分の好奇心を満足させたいと望み、キリストはもし釈放される見込みがあればたのまれることを何でもされるだろうと思った。

祭司たちと長老たちの大群がキリストについてヘロデのところへやってきていた。そして救い主が中へ入れられると、これらの高官たちはみな興奮してしゃべりながら、キリストに対する訴えをのべた。しかしヘロデは彼らの訴えにほとんど注意を払わなかった。彼は、キリストのなわをとくように命令し、同時にキリストの反対者たちが彼を手荒に取り扱っていることを非難した。世のあがない主の平静なお顔を同情をもって見入った彼がそこに読みとったものは知恵と純潔だけであった。ピラトと同様にヘロデもまた、キリストが悪意とねたみから訴えられているということを確認した。」（各時代の希望下巻 237）

- b. ヘロデとイエスの会見はどのように始まりましたか（ルカによる福音書 23:9（上旬）、10）。

「ヘロデがキリストに多くのことばで質問したが、その間ずっと救い主は深い沈黙をつづけられた。すると、王の命令によって、よばよばの不具者たちが呼ばれ、キリストは奇跡を行なってその主張を証明するように命令された。人々はあなたが病人をいやすことができると言っている。広くひろがっているあなたの評判がうそでないことをわたしは見たいのだと、ヘロデは言った。イエスはお答えにならなかったのヘロデはなおも言い張った。もしあなたが他人のために奇跡を行なうことができるのなら、いまそれを自分自身のために行ないなさい、そうしたらあなたのためになるだろうと。ふたたび彼は、うわさに聞く力があなたにあるという証拠を示せと命令した。」（同上 238）

- a. 質問者たちに対するキリストの態度と、その背後にある理由を述べなさい（ルカによる福音書 23:9（下句）；ペテロの第一の手紙 2:22-24）。

「キリストは見聞きしていない人のようであった。神のみ子は人の性質をおとりになった。彼は同様な事情のもとで人がしなければならないになさねばならない。だからイエスは、人が同様な立場に置かれたときに耐え忍ばねばならない苦痛と恥辱から自分がまぬかれるために奇跡を行なおうとされなかった。

ヘロデの良心は、ヘロデヤからバプテスマのヨハネの首を求められて恐ろしさに身ぶるいした時ほどいまは敏感ではなくなっていた。……そしていま彼は、自分はイエスを釈放することも罪に定めることもできる権力を持っているのだと何度も宣言して、イエスをおどした。しかしイエスの様子には、一言でも聞かれたような証拠はみられなかった。

ヘロデは この沈黙にいらだった。それは彼の権威に対してまったく無関心を示しているようにみえた。虚栄心の強い、尊大な王にとって、このように無視されることは公然と譴責されるよりも不愉快だった。ふたたび彼は腹立たしげにイエスをおどかしたが、あいかわらずイエスは平静にだまっておられた。

この世におけるキリストの使命は、いたずらな好奇心を満足させることではなかった。主は、心の傷ついた者をいやすためにこられた。罪に悩む魂の傷をいやすために何かことばを語るものであったら、主はだまってはおられなかったであろう。しかしイエスは、真理をけがれた足で踏みつけることしかししないような者たちに対しては何も言われることがなかった。」（各時代の希望下巻 238, 239）

- b. この出来事におけるキリストの模範からわたしたちは何を学ぶことができますか（箴言 26:4）。

「キリストは、このかたくなな王の耳を刺し通すようなことばを、ヘロデに言うこともおできになった。イエスは、ヘロデの前に彼の生活のあらゆる不義と彼にのぞもうとしている破滅の恐怖を示すことによって、彼を恐怖でふるえあがらせることもおできになった。しかしキリストの沈黙は、主がお与えになることのできた最もきびしい譴責であった。ヘロデは最も偉大な預言者によって彼に語られた真理をこぼんだので、もうほかのメッセージは受けられないのであった。天の大君には彼のために語られることばがなかった。人類の苦悩に対していつも開かれていた耳は、ヘロデの命令を聞く余地はなかった。悔い改めた罪人の上にいつもそそがれていたあわれみとゆるしを語るイエスの愛の目は、ヘロデに向けられる様子がなかった。最も感動的な真理を語り、この上なくやさしい願いをこめて最も罪深い者と最も墮落した者に訴えられた唇は、救い主の必要を感じない高慢な王に対してはとざされていた。」（同上 239, 240）

4.

キリストはヘロデによって虐待される

水/10月22日

- a. ヘロデはイエスに強要することができないと分かった時、どのように反応しましたか (ルカによる福音書 23:11 (上句))。

「ヘロデの顔は激怒で赤くなった。群衆の方を向くと、彼は、怒ってイエスは詐欺師だと非難した。それからキリストに彼は言った。もしあなたが主張通りの証拠を示さないならば、わたしはあなたを兵士たちと民衆の手に引き渡そう。彼らはあなたに語らせることができるかも知れない。もしあなたが詐欺師なら彼らの手にかかって死ぬのがあなたには一番ふさわしいのだ。もしまたあなたが神の子なら奇跡を行なって自分自身を救いなさいと。

このことばが語られたとたんに、人々はわっとキリストめがけて押しよせた。野獣のように、群衆はその餌食に突進した。イエスはあちらこちらへ引きずられ、ヘロデもやじ馬に加わって神のみ子はずかしめようとした。ローマの兵士たちが間にはいつて、狂気の群衆を押し返さなかったら、救い主は八つ裂きにされてしまわれたであろう。

『ヘロデはその兵卒どもと一緒にあって、イエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はなやかな着物を着せ……た』(ルカ 23:11)。ローマの兵士たちもこの虐待に加わった。これらの邪悪な、墮落した兵卒たちが、ヘロデとユダヤ人の高官たちに勢いづけられて、挑発できる限りのことが救い主に対してなされた。それでもイエスの天来の忍耐は変わらなかった。」(同上 240, 241)

- b. なぜヘロデはイエスをピラトのもとに送り返したのでしょうか (ルカによる福音書 23:11 (下句))。

「キリストの迫害者たちは、彼ら自身の品性でキリストの品性をおしはかろうとした。彼らはキリストが彼らと同じような悪い人間であるように言いふらしていた。しかし現在のあらゆる外観の奥に別な光景、すなわち彼らがいつかはあらゆる栄光のうちに見る光景が現われた。キリストの前でうちふるえた者もあった。粗暴な群衆がからかいながらキリストの前に頭をさげていたとき、同じ意図で進み出た者の中には、恐れて無言のまま引き返す者たちがいた。ヘロデは罪を自覚した。あわれみの光の最後の光線が、罪に固まった彼の心を照らしていた。この人はただの人間ではないと、彼は感じた。人性を通して神性がひらめいていたからであった。キリストが嘲る者たちや姦通者たちや殺人者たちにとりかこまれておられたその時、ヘロデは、み座についておられる神を見ているような気がした。

ヘロデはかたくなではあったが、キリストの有罪を裁可しようとはしなかった。彼はこの恐るべき責任からまぬかれたいと望んで、イエスをローマ人の法廷に送りかえた。」(同上 241)

5. ほふり場に引かれていく小羊のように 木/10月23日

- a. 神から離れた人の状態はどのようなものでしょうか (イザヤ書 53:6 (上句))。

「罪は科学となり、悪徳は宗教の一部分として神聖なものにされていた。反逆は人間の心の奥深くにくだきこみ、人は天に向かってはげしい敵意をいだいていた。人間は神を離れては向上できないことが宇宙の前に実例として示された。」(各時代の希望上巻 27)

- b. 神はどのようにわたしたちの回復のための扉を開いてくださっていますか (イザヤ書 53:5, 6, 11)。

「天の大君はご自分を喜ばせることはなさらなかった。このお方がなされたすべての事は人類の救いに関するものであった。あらゆる形の利己心はこのお方の御前で叱責された。このお方はわたしたちの代わりに苦しみを受けるために人性をとられ、ご自分の魂を罪の捧げ物となされた。人が神の律法に背いたために当然受けるべき打撃から救うためにこのお方は神に打たれ、苦しめられたのである。十字架から輝く光によって、キリストはすべての人をご自分のもとに引き寄せようとなされた。このお方の人としての御心は人類に対して同情なされた。このお方の御腕は彼らを受け入れるために開かれており、そしてこのお方はすべての人をご自分のところに来るように招いておられる。このお方の地上でのご生涯は自己否定とへりくだりの連続であった。」(教会への証 4 巻 418)

「当然キリストが受けられるべき取り扱いをわれわれが受けられるように、キリストはわれわれが当然受けるべき取り扱いを受けられた。われわれのものではなかったキリストの義によってわれわれが義とされるように、キリストはご自分のものではなかったわれわれの罪の宣告を受けられた。キリストのものであるいのちをわれわれが受けられるように、キリストはわれわれのものである死を受けられた。」(各時代の希望上巻 11)

個人的な復習問題 金/10月24日

1. ヘロデの前で沈黙を守るというキリストの決断からわたしは何を学ぶことができますか。
2. ヘロデのように、どのような状況の下でわたしは短気になる危険があるでしょうか。
3. わたしの代わりにイエスが苦しめられたのを見ることは、わたしの態度にどのような影響を与えますか。
4. ヘロデの宮殿におけるイエスの苦しみを述べなさい。
5. イザヤ 53 章を要約しなさい。

第一安息日献金 貧しい国のための文書

有名な言葉があります。「一滴のインクは、何百万もの人に考えさせることができる」。印刷されたものは、大きくその永続性のゆえに、単に語られた言葉よりも多くの重みを伝える傾向にあります。書かれたものがあれば、わたしたちは自分自身のペースで読むための時間を取ることができ、また後で見直したり、学ぼうとする情報をより深く考えることができます。深い霊的な主題にひたろうとするとときに、助けとなります。



歴史を通じて、次のことは事実です。「ルターのペンは力であった。彼の書き物は広くまかれ、世界をかき立てた。同じ働きが、わたしたちは何百倍にも増す設備を持っているため、意のままである。数多くの言語に翻訳された聖書は、この時代のための真理を前面に打ち出しており、わたしたちの手中にある。そしてそれらは全世界にすみやかに伝えられることができる。」(教会への証 6 巻 403)

「天から大いなる力を持って下り、地をその栄光で明るくするもう一人の御使の働きは、大部分において、わたしたちの印刷所によって成し遂げられるであろう。」(同上 7 巻 140)

1849 年に、ジェームズ・ホワイトは、現代の真理と呼ばれた小さい出版物を作成しました。「床の上に、印刷物の小さい山ができた。それから、兄弟姉妹たちは、その回りに集まって、目に涙を浮かべて、送り出される印刷物の上に神の祝福を祈り求めた。印刷物は、折って、包んで、宛名を書き、ジェームズ・ホワイトが、8 マイル離れたミドルタウンの郵便局に持って行った。こうして、セブンスデー・アドベンチストの印刷事業は始まったのである。」(初代文集 43)

この行為は、次のメッセージに答えたものでした。「あなたにお伝えすべき言葉が、わたしに与えられました。あなたは、小冊子を印刷し始め、それを人々に送らなければなりません。初めは、小さいものでよいでしょう。しかし、人々が読むにつれて、印刷する資金を送って来ます。それは、最初から成功します。」(同上 42)

送料が高騰し、国境規制によってさらに高価な流通手段が必要になった場合、どうなるでしょうか？ 私たちの購読料ではこれらの新たな経費を賄うことができません。ですから、初期の伝道者に語られた預言「人々が読むにつれて、印刷する資金を送って来ます」を成就するには、仲間の信者の親切な寛大さに頼らなければなりません。

この第一安息日献金が皆様の心に響き、現代の真理を読む必要のある世界中の人々のために、さらに献金していただけるようお祈りいたします。ありがとうございます！

出版支部の皆さんの兄弟より

イエスがむち打たれ、有罪を宣告される

暗唱聖句：「ピラトは彼らにむかって、『おまえたちはユダヤ人の王をゆるしてもらいたいのか』と言った。それは、祭司長たちがイエスを引きわたしたのは、ねたみのためであることが、ピラトにわかっていたからである。」（マルコによる福音書 15:9, 10）

「イエスの屈辱はイエスが高められることの保証であった。イエスの傷ついたこめかみから顔とひげを伝わって流れた苦悩の血のしたたりは、イエスがわれらの大祭司として『喜びのあぶら』をそそがれることの保証であった（ヘブル 1:9）。」（各時代の希望下巻 246）

推奨文献： 牧師への証 407-411

1. ピラトの弱さ

日/10月26日

- a. イエスがピラトの法廷に連れ戻された時、総督はこのお方に有利などのような主張をしましたか（ルカによる福音書 23:13-15）。
- b. ピラトは、一貫性のない自分の弱さによって、どのように破滅しましたか（ルカによる福音書 23:16; ヨハネによる福音書 19:1）。

「〔ピラト〕はイエスの無罪を宣言しておきながら、訴える者たちをなだめるためにイエスがむち打たれることに賛成した。彼は暴徒たちと妥協するために、正義と原則を犠牲にするのであった。このために彼は不利な立場に陥った。群衆は、彼の優柔不断につけこんで、囚人の生命を要求してますますわめいた。もし最初にピラトが断固とした態度をとって、無罪とわかった人間に有罪を宣告することを拒否したら、彼は、彼を一生しばりつけた悔恨と罪とがの致命的な鎖をたち切ることができたであろう。もし彼が正義についての自分の確信を実行していたら、ユダヤ人がつけあがって彼に命令するようなことはなかったであろう。キリストは死刑にされたであろうが、それでもその罪がピラトに着せられることはなかったであろう。しかしピラトは一步一步自分の良心を犯した。彼は、正義と公平をもって裁判することを言いのがれたので、いまや祭司たち 役人たちの手に陥ってほとんど無力になっている自分に気がついた。動揺と優柔不断が彼の破滅となった。」（各時代の希望下巻 242）

2. **ピラトに代わって神が働かれた**

月 / 10月27日

- a. 神はピラトにさらにどのような機会をお与えになりましたか（マタイによる福音書 27:19）。

「キリストの祈りに答えて、ピラトの妻のもとに天からみ使がおとずれ、夢の中で、彼女は救い主を見、共に語ったのであった。ピラトの妻はユダヤ人ではなかったが、夢の中でイエスを見たとき、イエスの性格や使命に疑いをもたなかった。彼女はイエスが神の君であることを知った。彼女は、イエスが法廷でさばかれるのを見た。彼女はその手が犯罪人の手のように固くしばられるのを見た。彼女はヘロデと兵卒たちが恐ろしい働きをしているのを見た。また祭司たちと役人たちがねたみと悪意に満ちて、気狂いのように訴えるのを聞いた。『わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は……死罪に当る者です』ということばを彼女は聞いた。彼女は、ピラトが『彼にはなんの罪も見いだせない』と言ってから、イエスをむち打ちのために引き渡すのを見た。彼女はピラトが有罪の宣告をくだすのを聞き、キリストを殺人者たちに引き渡すのを見た。彼女はカルバリーに十字架がたてられるのを見た。彼女は地が暗黒につつまれるのを見、『すべてが終った』という神秘的な叫びを聞いた。さらに彼女の目はもう一つの光景を見た。彼女はキリストが大いなる白い雲に乗り、一方地は空間に揺れ動き、キリストを殺した者たちがその栄光の前から逃げ出すのを見た。恐怖の叫び声をあげて目をさますと、彼女は、すぐピラトにあてて警告のことばを書いた。」（各時代の希望下巻 243, 244）

- b. ピラトはイエスを解放するために暴徒たちにどのような提案をしましたか（マルコによる福音書 15:6-10）。

「この祭の時に、民衆に選ばせて囚人をだれかひとり釈放するのが慣例となっていた。この習慣は異教の発明によるもので、その中には正義の影すらなかったが、ユダヤ人はこの習慣を非常に重んじていた。この時、ローマ当局は、死刑の宣告を受けたバラバという囚人を留置していた。この男は自分がメシヤであると主張していた。彼は、これまでと異なった秩序をうちたて、世直しをする権限をもっていると主張した。悪魔的な欺瞞のもとに、彼は窃盗や強盗によって手に入れることができる物は何でも自分のものだと言った。彼はサタンの媒介によってふしぎなわざを行ない。民衆の中から信者を獲得し、ローマ政府反対を扇動していた。宗教的な熱心さという仮面のもとに、彼は反逆と残酷なことしか考えない強情で命知らずな悪人だった。この男と、罪のない救い主とのどちらかを選ばせることによって、ピラトは、人々のうちに正義感をめざめさせようと考えた。彼は民衆が祭司たちや役人たちに反対して、イエスに同情するようにしたいと望んだ。」（同上 243, 244）

- a. 祭司たちはキリストの有罪判決を確実にするために何をしましたか、またそれは最終的に彼らにとって何を意味していましたか（マタイによる福音書 27:20）。
- b. ピラトが驚いたことに、群衆は最終的にどのような選択をしたでしょうか（マタイによる福音書 27:21-23; ヨハネによる福音書 18:39, 40）。

「『それではキリストといわれるイエスは、どうしたらよいか』と、ピラトはたずねた。大波のように動いている群衆はふたび悪鬼のようにほえた。悪鬼そのものが、人間の姿をとって群衆の中にいたのだから、『十字架につけよ』という答えよりほかに何を期待することができよう。」（各時代の希望下巻 244, 245）

「こうしてユダヤの指導者たちは、ついにこのような道を選んだ。彼らの決定は、いかなる人も開くことのできない書にしるされた。ヨハネはこの書がみ座にいますかたの手にあるのを見た。この決断は、ユダ族のししによってこの書が開封される日に、彼らの前に明らかにされ、彼らはその報復を受けるのである。

ユダヤ民族は、自分たちは天の寵愛（ちょうあい）を受けており、神の教会としていつどんな時でも称揚されることができると考えていた。彼らは、自分たちはアブラハムの子だと言明していた。そして彼らの目にはその繁栄の基礎はゆるぎのないものに見えたので、その権利を奪えるなら奪ってみよと天地に公言してはばからなかった。しかし彼らは、その不忠実な生活を送ることによって、みずからに罪の宣言を下し神から切りはなされるために道を開いたのであった。」（キリストの実物教訓 272-274）

- c. この場面は今日どのように繰り返されるでしょうか、またその中でわたしたちの役割は何でしょうか（ヨシュア記 24:15）。

「〔サタン〕は、神の民が自分に完全な忠誠を尽くすように彼らを世と束ねあわせることができないので、怒りに満たされている。諸王や役人たち、統治者たちは、自らに反キリストの焼き印を押し、聖徒たち一神の戒めを守り、イエスの信仰を持つ人々に対して戦いを挑むために出て行く龍として表されている。彼らはまた、神の民に対する敵意によって、キリストではなくバラバを選択することにおいても有罪であることを示すのである。」（牧師への証 39）

- a. ローマの兵卒たちは救い主の拷問にどのように加担しましたか、またこのお方の反応はどのようなものでしたか（ヨハネによる福音書 19:2, 3; マルコによる福音書 15:16-19）。

「ああ天よ、驚嘆せよ、ああ地よ、驚け。迫害する者たちと迫害されるおかたとを見よ。狂気した群衆が世の救い主をとりかこんでいる。嘲りと冷笑が冒涇のきたないことばに入りまじる。冷酷なやじ馬たちがイエスのいやしい生れと貧しい生活を口にする。神のみ子であるというイエスの主張がからかわれ、俗悪なじょうだんと侮辱的な冷笑が口から口へ伝わる。

残酷な暴徒たちに救い主を虐待させたのはサタンであつた。できればイエスのうちに復讐心を起こさせるか、あるいはイエスをご自分の釈放のために奇跡を行なわれるようにしむけることによって、救いの計画を破壊することがサタンの目的であつた。イエスの人間生活に一つでも欠点があれば、あるいはイエスの人性が恐るべき試練に一度でも耐えられなかったら、神の小羊は不完全な供え物となり、人類のあがないは失敗したのである。しかし、命令しさえすれば天の万軍をご自分の助けに呼ぶことがおできになるおかたが、天の威光をひらめかせることによって暴徒たちを恐怖のうちに目の前から追い払うことができたおかたが、最も下等な侮辱と暴行とをどこまでも平静に受けられたのであつた。」（各時代の希望下巻 246）

- b. 人々の前でキリストを傷つけた後、ピラトは何と公表しましたか（ヨハネによる福音書 19:4, 5）。

「神のみ子は、あざけりの衣といばらの冠をつけて立っておられた。腰まで衣をはがされたその背中には、残酷なむちの跡が尾を引いていて、そこから血がとめどなく流れていた。イエスのお顔は血に染み、疲労と苦痛の跡があらわれていた。しかし、このときほどイエスのお顔が美しく見えたことはなかった。救い主の顔つきは、反対者たちの前にあつて醜くならなかった。お顔のつくりのひとつひとつがやさしさと忍従と残酷な敵に対する最もやさしい同情とをあらわしていた。イエスの態度には臆病な弱さがなく、寛容の力と威厳があつた。イエスのかたわらの囚人はこれとはいちじるしく対照的であつた。バラバの顔つきのどの線も、彼がまさしく手に負えない悪党であることを物語っていた。その対照は見る者のひとりびとりに語りかけた。見物人の中には泣いている人たちもいた。イエスをながめて、彼らの心は同情でいっぱいになった。祭司たちと役人たちさえ、イエスをご自分の主張された通りのおかたであることを自覚した。」（同上 248, 249）

- a. ピラトはユダヤ人たちにどのような矛盾した提案をしましたか、またどのような宣言が彼を恐怖に陥れましたか (ヨハネによる福音書 19:6-8)。

「ピラトは はっとした。彼は、キリストとその使命について正しい観念を持っていなかったが、神について、また人間よりもまさった存在についてばく然とした信仰を持っていた。前に一度彼の心を通りすぎた一つの思いが、いまもつとはっきりした形をとって現われた。嘲りの紫の衣を着、いばらの冠をかぶって目の前に立っているのは神ではないだろうかと彼は疑った。」(各時代の希望下巻 250)

- b. イエスとピラトの間でどのような会話がなされましたか (ヨハネによる福音書 19:9-11)。

- c. ユダヤ人のどのような不正な主張がピラトを彼らの要求に卑怯にも服従させたのでしょうか (ヨハネによる福音書 19:12-16)。この罪に対して最も責められるべきは誰でしょうか。

「ピラトは暴徒たちの要求に屈服した。彼は自分の地位を危険にさらすよりも、イエスを十字架につけるために、引きわたした。しかし彼の用心にもかかわらず、彼の恐れていたことがのちになって彼の身に起こった。彼は名誉をはぎとられてその高い地位から追われ、キリストの十字架ののちまもなく、悔恨と傷つけられた誇りに苦しみながら、自らのいのちをたった。このように、罪と妥協する者はみな悲哀と破滅だけしか得られないであろう。」(同上 254)

「最も大きい罪と最も重い責任は、国民の中で最高の地位を占めている人たち、卑劣にも自ら裏切りつつあった聖なる信任の受託者たちにあった。」(同上 251)

個人的な復習問題

金/10月31日

1. わたしはピラトのどのような特徴を真似てしまう危険があるのでしょうか。
2. わたしもピラトのようにどのぐらいいばしば信頼できる警告を無視してきたでしょうか。
3. ピラトが直面したような圧力を受けたなら、わたしはどのように行動するのでしょうか。
4. ピラトはイエスを無罪にするためにどのような機転を用いましたか。
5. 神の御子の死の責めは誰にあるのでしょうか、それはなぜですか。

カルバリ

暗唱聖句：「キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった。聖書に、『木にかけられる者は、すべてののろわれる』と書いてある。」(ガラテヤ人への手紙 3:13)

「神の律法を犯したために、アダムとエバはエデンから追放された。キリストはわれわれの身代りとして、エルサレムの境界の外で苦難を受けられるのであった。主は門の外で死なれたが、そこは重罪人たちと殺人者たちが処刑される場所であった。」(各時代の希望下巻 257)

推奨文献： 教会への証 2 巻 200-215

1. 兵卒たちの分

日 / 11 月 2 日

- a. ピラトがイエスをローマ兵に引き渡した後、彼らは何をしましたか (マタイによる福音書 27:27-30)。
- b. 兵卒たちはイエスを辱めた後、どこへこのお方を連れて行きましたか (マタイによる福音書 27:31; ヨハネによる福音書 19:17)。他に誰が彼らに従ったでしょうか。

「キリスト、尊い神の御子は連れていかれ、十字架がこのお方の肩にのせられた。一步ごとにこのお方の傷口からは血が流れ出た。苦々しい敵と無情な傍観者の群衆に囲まれて、このお方は十字架へと連れていかれる。……

悲しみの内にある弟子たちは殺害者たちの群れの後ろから遠く離れてこのお方に従っていった。」(教会への証 2 巻 208)

「イエスの有罪についての知らせがエルサレムじゅうにひろまり、あらゆる階級と地位の人々が処刑場へむらがり集まった。祭司たちと役人たちは、もしキリスト自身を自分たちの手に引き渡してもらえば、その弟子たちは苦しめないかと約束していたので、弟子たちも信者たちも、エルサレムの町や周囲の地方からやって来て、救い主のあとをついて行く群衆に加わった。」(各時代の希望下巻 257)

- a. 十字架が置かれた時のキリストの身体的な状態、そしてその後進むためにとられた取り計らいを説明しなさい(マタイによる福音書 27:32)。

「弟子たちといっしょに過越の食事をとられてから、イエスは食べることも飲むこともされなかった。イエスは、ゲッセマネの園で、サタンの勢力との戦いに苦しめた。主は裏切られた苦悩に耐え、弟子たちがご自分を見捨てて逃げるのをごらんになった。主は、アンナスのところへ、それからカヤパのところへ、そしてピラトのところへと連れて行かれた。主は、ピラトのところからヘロデのもとへ送られ、またピラトのところへ送りかえされた。侮辱に新たな侮辱を、嘲笑に嘲笑を加えられ、むち打ちによって二度苦しめられ、一ひと晩じゅう、人間の魂を極度に試みるような性質の場面が次々に続いたのであった。キリストは失敗されなかった。主は神の栄えとなるのに役立つことばよりほか語られなかった。恥知らずな裁判の茶番劇の間じゅうずっと、イエスはしっかりした威厳のある態度を保たれた。しかし二度目のむち打ちのあと、十字架が主に背負わされると、人性はもはや耐えられなかった。主はその重荷の下に、気を失って倒れてしまわれた。……

この時、いなかからやって来たクレネ人のシモンという他国人が群衆に行き会う。……彼はその場の光景に驚いて立ちどまる。シモンが同情した顔つきをしていると、人々は彼をつかまえて、その肩に十字架をのせる。

シモンはイエスのことを聞いていた。彼の息子たちは救い主の信者であったが、彼自身は弟子ではなかった。カルバリーまで十字架をかついで行ったことは、シモンにとって恵みであった。彼はその後いつもこの摂理を感謝した。彼はこの経験から自ら進んでキリストの十字架を背負い、その重荷によることで耐えるようになった。」(各時代の希望下巻 258, 259)

- b. 同情の言葉をお聞きになって、イエスは何を預言なさいましたか(ルカによる福音書 23:27-31)。

「キリストは、目の前の光景から、エルサレム滅亡の時を予見された。その恐るべき場面において、いまキリストのために泣いている者たちの多くが子供たちと共に滅びるのであった。……

イエスは、世界に臨むべき最後の滅亡の象徴をごらんになった。『そのとき、人々は山にむかって、われわれの上に倒れかかれと言い、また丘にむかって、われわれにおおいかぶされと言い出すであろう。もし、生木でさえもそうされるなら、枯木はどうされることであろう』と、イエスは言われた。生木によって、イエスは罪なきあがない主であるご自身を象徴された。神は、罪とがに対する怒りを、ご自分の愛するみ子の上にそそがれた。イエスは人類の罪のために十字架にかかれるのであった。ましてや、罪を犯しつづけた罪人はどんな苦難を受けねばならないことだろう。」(各時代の希望下巻 260)

- a. カルバリーの光景とそれがイエスの母に与えた特に胸が張り裂けるような影響について述べなさい(マタイによる福音書 27:33, 34; ヨハネによる福音書 19:18, 25)。

「処刑場に着くと、囚人たちは、拷問道具にしばりつけられた。二人のどろぼうたちは、彼らを十字架につける人たちの手の中であばれた。しかしイエスは、抵抗されなかった。イエスの母は、愛する弟子ヨハネにささえられて、カルバリーまで息子のあとについてきていた。彼女は、イエスが十字架の重荷の下に気を失われるのを見ると、イエスの傷ついた頭の下にささえの手をさしのべたい、かつては自分の胸にいだかれたあのひたいを洗ってあげたいと心に願った。しかし彼女は、この悲しい特権をゆるされなかった。弟子たちと同じように、彼女は、イエスが力をあらわして、反対者たちの手からご自身を救い出されるだろうという望みをまだいっていた。しかしいま目の前に起こりつつある場面をイエスが予告された時に言われたことばを思い出すと、彼女の心はふたたび沈んでしまうのであった。どろぼうたちが十字架にしばりつけられると、彼女は、不安な思いに苦しめられながら、見ていた。死人を生きかえらせたおかたが、十字架にかけられるがままになられるだろうか。神のみ子がこんなにも残酷な殺されかたをされるがままになられるのだろうか。イエスがメシヤであるという信仰をあきらめなければならないのだろうか。苦悩のうちにあられるイエスにお仕えする特権さえないままに、イエスの屈辱と悲しみを見なければならないのだろうか。彼女はイエスの両手が十字架の上にひろげられるのを見た。金づちとくぎが持つてこられ、先のとがったくぎがやわらかい肉に打ち込まれると、悲しみに打ちひしがれた弟子たちは、失神しそうなイエスの母のからだをかかえてこの残酷な場面から連れ出した。」(各時代の希望下巻 261, 262)

- b. 兵卒たちのどのような行動がイエスに関するもう一つの預言を成就させましたか(詩篇 22:16-18)と(ヨハネによる福音書 19:23, 24)を比較しなさい。

「十字架につけられる幾百年も前に、救い主はご自分が受けられる取り扱いを預言された。……イエスの衣服についての預言は、十字架につけられたおかたの味方の側もしくは敵の側の助言や干渉なしに実行された。イエスを十字架につけた兵士たちに、イエスの衣服が与えられた。キリストは、彼らが仲間のあいだで衣服を分け合うときの言い争いを聞かれた。その下着は縫い目なしに一つに織ったものであったので、彼らは、『それを裂かないで、だれのものになるか、くじを引こう』と言った(ヨハネ 19:24)。」(同上 265)

- a. ピラトの命令によって十字架に掲げられた三か国語の碑文はどのようなものでしたか(ヨハネによる福音書 19:19, 20)。ユダヤの指導者たちはどのように反応しましたか(ヨハネによる福音書 19:21, 22)。

「この罪状書きはユダヤ人を怒らせた。ピラトの法廷で、彼らは『彼を十字架につけよ。』『わたしたちには、カイザル以外に王はありません』と叫んだ(ヨハネ 19:15)。カイザル以外の王を認める者はだれでも反逆者であると彼らは断言した。ピラトは彼らが表明した意見を書きあらわしたのである。イエスがユダヤ人の王であるということ以外に何の罪状も書かれなかった。この罪状はローマの権力に対するユダヤ人の忠誠を事実上認めるものであった。それは、イスラエルの王たることを自称する者はだれでも、死刑に値するものと彼らから判断されることを宣言していた。祭司たちはやり過ぎたのだ。彼らがキリストの死をたくらんでいた時、カヤパはひとりの人が国民を救うために死ぬのはよいことだと断言した。いま彼らの偽善がばくろされた。キリストを滅ぼすために、彼らは自分たちの国の存在さえ犠牲にしようとしていた。

祭司たちは、自分たちのやったことを見て、ピラトに罪状書きを書き直してくれるようにたのんだ。『「ユダヤ人の王」と書かずに、「この人はユダヤ人の王と自称していた」と書いてほしい』と彼らは言った(ヨハネ 19:21)。しかしピラトは自分のこれまでの弱さに腹が立っていたので、ねたみ深くてこうかつな祭司たちと役人たちを完全に軽蔑した。彼は、『わたしが書いたことは、書いたままにしておけ』と冷淡に答えた(ヨハネ 19:22)。

ピラトよりも、あるいはユダヤ人よりも高い権力が、その罪状書きをイエスの頭上にかけるように命じたのだった。神の摂理によって、それは思いをめぐめさせ、聖書を調べさせるのであった。キリストが十字架につけられた場所は都に近かった。そのころ、全地から幾千の人々がエルサレムにきていたので、ナザレのイエスをメシヤと宣言している罪状書きは人々の注目のまとなるのだった。それは神がみちびかれた手によって書かれた生きた真理であった。」(各時代の希望下巻 263-265)

- b. イエスは十字架上で何を祈られましたか、またそこには、だれが含まれていましたか(ルカによる福音書 23:34)。

「敵のために祈られたキリストの祈りは世界を包含していた。それは、世の始めから時の終わりまで、かつて生存し、これからも生存するすべての罪人を含んでいた。すべての者の上に神のみ子を十字架につけた罪がおかれている。すべての者にゆるしが豊かにさし出されている。望む者はだれでも、神とやわらぎ、永遠の生命を継ぐことができるのである。」(同上 263)

5. 「すべてが終わった」

木 / 11月6日

- a. イエスがわたしたちに残された高貴な模範の一つの側面を挙げなさい (ヨハネによる福音書 19:26, 27)。

「そしていま、最後の苦悩のうちにあっても、イエスは、悲しんでいるやもめの母のために道を備えることをお忘れにならない。この同じ精神が主の弟子のひとりびとりにみられるであろう。キリストに従う者たちは、親を敬い、養うことを彼らの宗教の一部と考えるであろう。」(各時代の希望下巻 274)

- b. イエスはご自分をお捧げになる最後の瞬間に誰をお救いになりましたか (ルカによる福音書 23:39-43)。イエスの最後の叫びにはどのような重要性がありましたか (ヨハネによる福音書 19:30)。

「昔の言葉には句読点がついていなかった。〔ルカ 23:34 にある〕句読点は、今日の前でも後でもつけることができた。」(古代東洋原本からの聖書 1049)

『すべてが終わった』との大声がキリストの口から出たとき、祭司たちは宮で務めを行なっていた。夕べのいけにえをささげる時間であった。キリストを象徴する小羊が、殺されるために連れてこられていた。深い意味のある美しい衣を着た祭司が、ちょうどアブラハムが息子を殺そうとしたときのように、ナイフをふりあげていた。人々は熱心にじっと見つめていた。しかし地が揺れ動く。主ご自身が近づかれるからである。引き裂ける音をたてて宮の内部の幕が上から下まで目に見えない手で裂かれ、かつては神のご臨在に満たされていた場所が群衆の目の前に開かれる。

.....

すべてが恐怖であり、混乱である。祭司はまさにいけにえを殺そうとしている。しかしそのナイフは感覚を失った手から落ち、小羊は逃げ去る。神のみ子の死によって、型が本体に合ったのである。大いなるいけにえがささげられたのである。至聖所への道が開かれている。新しい、生きた道がすべての人のために備えられる。」(各時代の希望下巻 280)

個人的な復習問題

金 / 11月7日

1. イエスは、ローマの兵士がご自分を十字架につけるために連れて行く前に、彼らからどのように扱われましたか。
2. イエスは、ゴルゴダへの道のりにおいてさえ、他の人々のことを思いやっておられることを、どのように示されましたか。
3. イエスの十字架において成就した預言を述べなさい。
4. イエスは、十字架にかかっておられるときに、どのように祈られましたか。
5. イエスの「すべてが終わった」という叫びには、どのような意味がありましたか。

イエスの埋葬と復活

暗唱聖句：「彼は暴虐を行わず、その口には偽りがなかったけれども、その墓は悪しき者と共に設けられ、その塚は悪をなす者と共にあった。」（イザヤ書 53:9）

「イエスのご自分がなすために来られた働きを成し遂げるまでは、死にたまわなかった。イエスは臨終の息の下から、『すべてが終わった』と叫ばれた。」（生き残る人々 261）

推奨文献： セレクトド・メッセージ 1巻 301-303

1. 永続的な制度

日/11月9日

- a. 世界の創造とあがないの両方において、どの神聖な制度が、永遠にわたって聖別されましたか、また永遠にわたって聖別されますか（創世記 2:1-3; ルカによる福音書 23:52-56）。

「世の始めに、天父とみ子は、創造の働きののちに安息日を休まれた。『天と地と、その万象とが完成した』とき、創造主は天のすべての住民とその輝かしい光景をながめてよろこばれた（創世記 2:1）。『かの時には明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった』のであった（ヨブ記 38:7）。いまイエスは、あがないの働きを休まれた。この地上でイエスを愛した人々の間には悲しみがあつたが、天にはよろこびがあつた。天の住民たちの目には、未来の約束が輝かしくうつった。回復された被造物、あがなわれた人類は、罪を征服してしまったので、もう決して墮落することがないのである。神と天使たちは、キリストの完成された働きから生じるこの結果をごらんになった。……『神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時』になっても、創造の安息日、すなわちイエスがヨセフの墓で休まれたこの日は、やはり休息とよろこびの日となるのである（使徒行伝 3:21）。救われた諸国の民が『安息日ごとに』よろこびの礼拝をもって神と小羊を拝するとき、天と地は声を合わせて賛美するのである（イザヤ書 66:23）。」（各時代の希望下巻 293、294）

2. 墓の中で休まれる

月/11月10日

- a. 救い主の埋葬には、どの影響力のある二人の人物が責任を引き受けましたか（ヨハネによる福音書 19:38-42; イザヤ書 53:9）。

「この危急に、アリマタヤのヨセフとニコデモが弟子たちの助けに現われた。この人たちはふたりともサンヒドリンの議員でピラトを知っていた。ふたりとも富裕で勢力のある人たちだった。彼らはイエスのおからだをりっぱに埋葬しようと決心していた。」（各時代の希望下巻 299）

- b. この安息日に、ユダヤ人の役人たちの思いを占めていたのは何でしたか（マタイによる福音書 27:62-66）。

「〔ユダヤの指導者たち〕は、その安息日、彼らはじっとしていることができなかった。彼らは、けがれを恐れて異邦人のしきいをまたごうとはしなかったが、キリストのからだについて相談した。彼らが十字架につけたキリストを、死と墓がとどめていなくてはならない。……

祭司たちは、墓場を守るように指示を与えた。入口の前に大きな石がおかれていた。彼らはこの石の上にひもを張り渡して両端を岩に固定し、ローマの印で封印した。封印を破らなければその石を動かすことができなかった。それから墓をこじあげられないように、周囲に百人の番兵が配置された。祭司たちは、キリストのからだを、その置かれたところにおいておくためにあらゆる手を尽くした。キリストは、永遠に墓の中にとどめておかれるかのように、厳重にそこに封印されていた。」（同上 307、308）

- c. 墓を封印するというこの策略において、どの預言が、成就しましたか（詩篇 2:1-4）。

「キリストの復活を予防するためにとられた手段そのものが、キリストの復活の証拠について最も有力な議論である。墓の周囲におかれた番兵の数が多ければ多いほど、キリストがよみがえられたというあかしは一層強力になる。…生命の主を墓の中にとじこめておくには、ローマの番兵もローマの軍隊も無力であった。キリストがとき放たれる時が迫っていた。」（同上 308）

- a. 週の初めの日の朝に何が起こりましたか（マタイによる福音書 28:2-4）。

「力のすぐれた天使たちが墓を守り、生命の君を迎えようと待っていた。……

さあ、祭司たちと役人たちよ、あなたがたの防備力はどこにあるのか。人の力を決して恐れたことのなかった勇敢な兵士たちが、いまは剣ややりもなしにとらえられた捕虜のようである。彼らが見あげる顔は人間の戦士の顔ではない。それは主の軍勢の中の一番強い戦士の顔である。この使者は、サタンが落ちたあとの地位を占めている者である。それはベツレヘムの丘でキリストの誕生を宣告した者である。彼が近づいて地が震動し、暗黒の軍勢が逃げ去り、彼が石をころがし去ると、天が地におりてくるようにみえる。兵士たちは、彼がその石をあたかも小石のようにとりのぞくのを見、彼が、神のみ子よ、姿を現してください、父があなたを呼んでおられますと叫ぶのを聞く。彼らはイエスがよみから現われて、開かれた墓のあたりで、『わたしはよみがえりであり、命である』と宣言されるのを聞く（ヨハネ 11:25）。イエスが威光と栄光のうちに姿を現わされると、天使の万軍は、あがない主をあがめて、その前に低く頭をたれ、賛美の歌でイエスを迎える。」（各時代の希望下巻 309、310）

- b. 何人かの弟子たちが墓に向かって行ったとき、どのような驚きを経験しましたか（ヨハネによる福音書 20:1; ルカによる福音書 24:1-3）。

- c. どのようなメッセージと指示を、天使は女たちに与えましたか。また彼女たちはどのように応じましたか（マルコによる福音書 16:5-8）。

「女たちがそのあたりでうろうろしていると、突然彼女たちはそこにいるのが自分たちだけではないことがわかった。輝く衣を着た若者が墓のそばに腰をおろしていた。それは石をころがした天使であった。彼は、イエスの友だちを驚かさないように、人間の姿をとっていた。しかし彼のまわりには、まだ天の栄光の光が輝いていたので、女たちは恐れた。彼女たちは向きを変えて逃げようとしたが、天使のことが彼女たちの足をとどめた。」（同上 321）

4. 品性があらわされる

水 / 11月12日

- a. 空の墓の意味に関して、弟子たち一特にヨハネの熱心さから、なぜわたしたちは活力を受けることができるのですか（ヨハネによる福音書 20:2-4）。

「ヨハネは、ぶどうの木が堂々とした支柱にすがりつくようにして、すがりついた。自分の主人のためであれば、法廷の危険をものともせず、十字架のそばにとどまっていた。そしてキリストがよみがえられたという知らせに、彼は性急なペテロにもまさる熱心さで墓へ急いだ。」（きよめられた生涯 53）

- b. わたしたちはイエスがご自分の復活に続いて、イエスが提供された秩序と上品さの模範から、何を学ぶことができますか（ヨハネによる福音書 20:5-7）。

「死に装束をこのように念入りに置いたのはキリストご自身であった。強い天使が墓へやってくると、それまで仲間の天使と主のおからだを守っていたほかの天使が加わった。天からきた天使が石をころがしてどけると、もうひとりの天使が墓にはいつて、イエスのおからだに巻かれていた布をほどいた。しかし、それをたたんでその場に置いたのは救い主のみ手であった。星も原子もみちびかれるイエスの御目には、重要でないものは何もなかった。秩序と完全が主のすべてのみわざに見られた。」（各時代の希望下巻 322）

「こうして、行為をくり返しているうちにそれが習慣となり、習慣は品性を形成し、品性は、わたしたちの現世と永遠の運命を決定するのである。

小事に忠実であってこそ始めて、大きな責任が負わせられたときにも忠実に行動するように訓練されるのである。」（キリストの実物教訓 332、333）

- c. 見張りはユダヤ人の指導者たちに、どのメッセージを伝えましたか（マタイによる福音書 28:11）。

「兵士たちは異様な姿を現わした。彼らは、恐怖にふるえ、顔色を失って、キリストの復活を証言した。兵士たちは、自分が見たとおりのことをのこらず語った。事実以外のことを考えたり話したりする時間はなかった。彼らは、苦痛に満ちた口調で、十字架につけられたのは神のみ子でした、わたしたちは天使がイエスを天の大君、栄光の王として宣言するのを聞いたのですと言った。」（各時代の希望下巻 312、313）

- a. 祭司長は、復活の報告が出回るのを防ぐために、何をしましたか（マタイによる福音書 28:12-15）。

「祭司たちの顔は死人のようであった。カヤパがしゃべろうとした。彼の唇は動いたが声にならなかった。兵士たちが会議室から出ようすると、一つの声が彼らをとどめた。カヤパがやっと口をきいたのだ。待て、待てと彼は言った。おまえたちの見たことをだれにも言うてはならないぞ。

それから、いつわりの知らせが兵士たちにさずけられた。『「弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだ」と言え』と祭司たちは言った（マタイ 28:13）。ここで彼らは自ら策略につまづいた。兵士たちは、自分たちが眠っている間に弟子たちがイエスのからだを盗んだと、どうして言うことができよう。もし、眠っていたらどうしてそれがわかろうか。そして、もし弟子たちがキリストのからだを盗んだという証拠があったのだったら、祭司たちはまっさきに弟子たちの罪を鳴らしたのではないだろうか。あるいはまた、番兵たちが墓で眠ったのだったら、祭司たちはまっさきにこの番兵たちをピラトに訴えたのではないだろうか。

兵士たちは、勤務中に眠ったという告発を受けることを思っただけで身ぶるいした。これは死刑の罰に相当する犯罪だった。いつわりの証言をして民をあざむき、自分たちの生命を危険にさらしてよいものだろうか。彼らは不寝番までやって、疲れる見張りをしたではないか。たとえ金のためではあっても、偽証をするなら、裁判で自分たちの立場はないではないか。

祭司たちは、自分たちの恐れている証言を沈黙させるために、ピラトだってわれわれ同様こんなうわさが言いふらされるのを好まないのだと言って、番兵たちの身の安全を保証することを約束した。ローマ人の兵士たちは金のために正直をユダヤ人に売った。彼らは事実についてまことに驚くべき知らせを背負って祭司たちの前にはいつてきたが、祭司たちが彼らのために作ってやったいつわりのうわさを舌ののせ、金を背負って出て行った。」（各時代の希望下巻 313、314）

個人的な復習問題

金 / 11月14日

1. わたしは、ニコデモやアリマタヤのヨセフのように、どのようにして神のみ事業を支援することができますか。
2. わたしは、丁寧にたたまれた死に装束から、何を学ぶことができますか。
3. わたしはどのようにローマの兵卒のように自分の尊厳を売り渡す危険に陥るかもしれませんか。
4. 墓の番兵の経験を述べなさい。
5. 祭司たちの虚言に含まれている矛盾を説明しなさい。

イエスが弟子たちに姿を現す

暗唱聖句：「弟子たちは主を見て喜んだ。」(ヨハネによる福音書 20:20 下句)

「キリストの復活後、地上における主の最初の働きは、弟子たちに対する変わらない愛とやさしい思いやりを彼らに確信させることであった。」(各時代の希望下巻 327)

推奨文献： 各時代の希望下巻 320-338
キリストの実物教訓 10-20

1. 墓での奇跡

日 / 11 月 16 日

- a. マグダラのマリアが鳴いていたとき、彼女は、立ち止まって墓の中を見ました。そこに何をみましたか (ヨハネによる福音書 20:11-13)。
- b. だれに、またどのように、イエスはご自身を表されましたか (ヨハネによる福音書 20:14-18)。

「涙にくもった目で、マリヤは人の姿を見たが、園の番人だと思って、『もしあなたが、あのかたを移したのであれば、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります』と言った (ヨハネ 20:15)。もし、この富める人の墓が、イエスにとってあまりにりっぱすぎる埋葬所と考えられるなら、わたしがイエスのために場所を提供しよう。キリストご自身の声によってからになった墓、すなわち、ラザロが横たわっていた墓があった。そこを主の埋葬所としたらどうだろう。十字架につけられた主のとうとおからだをお世話できるなら、悲しみのうちにある自分にとって大きな慰めになると彼女は思った。

しかしいまイエスは、そのなつかしいお声で、『マリヤよ』と、彼女に言われた。いまマリヤは自分に話しかけているのが見知らない人ではないことがわかり、ふり向いて、生きておられるキリストを目のあたりに見た。」(各時代の希望下巻 323)

「マリヤは、イエスの復活ののち一番さきに墓にいた。よみがえられた救い主のことを一番さきに言いひろめたのはマリヤであった。」(同上中巻 396)

- a. キリストの弟子の二人が、エマオ野村の途上にあつたとき、何が起こりましたか（ルカによる福音書 24:13-16）。

「いま〔二人の弟子たち〕は、瞑想と祈りのために家へ帰るところだった。彼らは裁判と十字架の処刑の場面について語り合いながら、悲しい気持ちで夕暮れの道をたどっていた。こんなにまったく落胆したことはなかった。望みもなく信仰もなく、彼らは十字架の影の中を歩いていた。

道をまだあまり遠くまで進まないうちに、ひとりの見知らぬ人がいっしょになった。しかし彼らは憂うつと失望に心を奪われていたので、その人をはっきり観察しなかった。」（各時代の希望下巻 330）

- b. 続いて起きた会話を述べなさい（ルカによる福音書 24:17-24）。

「〔二人の弟子たち〕は、キリストがお与えになった教訓について議論していたが、それは理解できないように思えるのだった。彼らが、起こったできごとについて話していると、イエスは彼らを慰めたいと熱望された。イエスは、彼らの悲しみをごらんになっていた。あんな屈辱を受けたこの人が果たしてキリストだろうかという思いを彼らの心に起こさせる矛盾と困惑に満ちた考え方を、イエスは理解された。彼らは悲しみをおさえることができないで、泣いた。イエスは、彼らの心が愛によって主につながっていることをお知りになり、彼らの涙をふいて、よろこびに満たされるようにしたいと望まれた。しかし主は、まず第一に、決して忘れることのできない教訓を彼らにお与えにならねばならない。」（同上 330、332）

- c. イエスはどのように優しく彼らに預言を説明なさいましたか（ルカによる福音書 24:25-27）。

「もし〔キリスト〕が最初にご自分を彼らにお知らせになったら、彼らの心は満足してしまっただろう。よろこびのあまり、彼らはもう何も求めなかったであろう。彼らは、旧約の型と預言を通して、キリストについてたてられているあかしを理解する必要があった。これらのものの上に彼らの信仰が築かれねばならない。キリストは、彼らをさとらせるのに奇跡を行なわず、聖書を説明することがその最初の働きであった。彼らは、キリストの死を彼らのすべての望みの消滅とみなしていた。ところがイエスは、ご自分の死こそ、彼らの信仰の最も強力な証拠であることを預言者の書からお示しになった。」（各時代の希望下巻 333、334）

- a. イエスがエマオを通り過ぎて、旅路を続けていかれる様子だったとき、この二人の弟子たちは、どのような申し出をしましたか（ルカによる福音書 24:28, 29）。

「もし、弟子たちがしいて招待しなかったら、彼らは、旅の道連れがよみがえられた主であることを知らなかったであろう。キリストはだれにも交際を強制されない。彼は、ご自分を必要とする者と交際される。彼はどんな貧しい家にもよろこんでおはいりになり、どんないやしい心も励まされる。しかし、もし人が無関心で、天のお客のことを考えなかったり、いっしょにいていただきたいと願ったりしなければ、イエスは通り過ぎておしまいになる。こうして、多くの者が大きな損失をこうむるのである。キリストが、途中いっしょに歩いておられたのに、弟子たちがイエスに気がつかなかったように、彼らもまた、キリストに気がつかないのである。」（各時代の希望下巻 336）

- b. どのように、またいつ、二人の弟子たちは、ついによみがえられた救い主だとわかりましたか。そしてどのようにわたしたちも同様な喜びを持つべきですか（ルカによる福音書 24:30-32）。

「簡単な夕食のパンがすぐに用意される。それは、食卓の正面に席をとったお客の前におかれる。すると彼は、食物を祝福するために手をさし出される。弟子たちは驚きのあまり、あどずさりする。道連れの人、主がいつもされていたのと同じように手をさし出している。もう一度よく見ると、見よ、その手には釘のあとが見える。ふたりは同時に、主イエスだ、死からよみがえられたのだと叫ぶ。

彼らは立ち上がって主の足下にひれふし、主を拝する。しかし、主のお姿は目の前から消えてしまった。彼ら最近までおからだを墓に横たえておられたおかたが席を占めておられたあたりを見て、互いに言う、『道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互いの心が内に燃えたではないか』（ルカ 24:32）。」（同上 336、338）

「生ける神を呼び求め、神の臨在を熱望している者がたくさんある。彼らの心に神の言葉を語ろう。これまでただ伝説と人間の説と、格言だけを聞いていた人々に、魂を新たに、永遠の生命に至らせることができるおかたの声を聞かせよう。
.....

もし旧約時代の聖徒たちが、あのように輝かしい忠誠のあかしを立てたとするならば、幾世紀にわたって蓄積された光が輝いている者は、真理の力について、もっと著しいあかしを立てるべきではなからうか。」（国と指導者下巻 227）

- a. 二人の弟子がエマオでイエスだとわかった途端、ただちに何をしましたか（ルカによる福音書 24:33-35）。

「しかし、彼らはこのすばらしい知らせを伝えなくてはならないと思うと、すわって語っていることができない。彼らの疲れと空腹はどこかへいつてしまった。彼らは、食事に手もつけないで、よろこびのあまり、すぐにもう一度さっきやってきた道を出かけ、都の弟子たちにこの知らせを伝えるために急ぐ。道は安全でないところもあったが、彼らは、つるつるする岩にすべりながら、けわしい場所を越えて行く。彼らは、自分たちといっしょに道を歩かれたおかたの保護があることを見もしなければ、知りもしない。旅のつえを手にして、彼らはもっと早くもっと早くお願いながら道を急ぐ。彼らは道を見失ってはまた発見する。時には走りながら、時にはつまずきながら、彼らは目に見えない道連れイエスに途中ずっとそば近くに付きそわれながら、前進する。

夜は暗いが、義の太陽が彼らを照らしている。彼らの心はよろこびにおどる。彼らは新しい世界にいるような気がする。キリストは生きておられる救い主である。彼らは、もはやキリストが死んでおられるといて嘆かない。キリストはよみがえられたのだと、彼らは何度も何度もくりかえす。この知らせを、彼らは悲しんでいる者たちに伝えるのだ。彼らは、エマオへの道中のふしぎな話を弟子たちに語らねばならない。彼らは、途中でだれといっしょになったかを語らねばならない。彼らは、世に与えられた最高のメッセージ、今も永遠までも、人類家族の望みがかかっているうれしいおとずれをたずさえているのだ。」（各時代の希望下巻 338）

- b. キリストの弟子たちのほとんどがエルサレムの二階の広間にいたとき、予期せず、何が起こりましたか（ルカによる福音書 24:36-40; ヨハネによる福音書 20:19-21）。

「〔二人の弟子たち〕はイエスがなくなれる前の最後の一晚を過ごされた二階の広間に行く。……へやのとびらは、固くとぎされている。案内を求めて戸をたたくが、応答はない。すべてが静まりかえっている。そこで彼らは名前を名のる。とびらが注意深く開かれ、彼らははいって行く。そのとき目に見えないもうひとりのおかたが彼らといっしょにおはいりになる。するととびらはふたたび固くとぎされて、スパイを防ぐ。……

見よ、もうひとりのおかたが彼らの前に立たれる。どの目もその見知らないおかたにくぎづけにされる。案内を求めて戸口をたたいた者はなかった。足音もきこえなかった。弟子たちはびつくりして、何事かとあやしむ。そのとき、彼らはほかならぬ主の声を聞く。『安かれ』ということばが、はっきりと明らかに主の口から語られる。」（同上 339、340）

- a. イエスは、罪と罪人の扱いに関して、教会にどの責任を負わせましたか（ヨハネによる福音書 20:22, 23）。

「弟子たちが教会に関連した正式の義務を果たすことができる前に、キリストはご自分の霊を彼らに吹きかけられた。キリストは、非常に神聖な責任を彼らに委託しようとしておられた……

組織された教会に、キリストは、教会員個人に対する責任を負わせておられる。罪におちいる人たちに対して、教会は警告し、教え、できるなら回復する義務がある。『あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい』と主は言われる（テモテ第二 4:2）。まちがった行為に対して正しい態度をとりなさい。危険のうちにあるひとりびとりの魂に警告なさい。自分をごまかしているのをそのままにしておいてはならない。罪を罪と呼びなさい。うそをつくこと安息日を破ること、盗むこと、偶像をおがむこと、そのほかあらゆる悪について神が言っておられることを告げなさい。『このようなことを行う者は、神の国をつぐことがない』（ガラテヤ 5:21）。もし彼らがあくまで罪を離れないならば、あなたがたが神のみことばによって宣告したさばきは、天で彼らの上にくだるのである。罪を犯すことをえらぶことによって、彼らはキリストを否認するのである。教会は、彼らの行為を承認しないということを示さねばならない。さもなければ、教会自身が主をはずかしめることになる。教会は、神が罪について言っておられることを言わねばならない。教会は、神が指示しておられるとおりに罪を処理しなければならぬ。そうするとき教会の行動は天で批准される。教会の権威をあなどる者はキリストご自身の権威をあなどるのである。

しかし、この問題には明るい一面がある。『あなたがたが許す罪は、だれの罪でも許され』る（ヨハネ 20:23）。この考え方を第一にしよう。まちがいを犯している人々のために働くときに、どの目もキリストに向けさせよう。牧者は、主の牧場の群れにやさしい心づかいを持とう。まちがいを犯している人たちに救い主のゆるしとあわれみについて語ろう。罪人が悔い改めるように、そしてゆるすことがおできになるキリストを信ずるように励まそう。」（各時代の希望下巻 342-344）

個人的な復習問題

金/11月21日

1. わたしは、マリヤがイエスを探した時刻から、何を学ぶことができますか。
2. イエスがエマオでの途上で二人をどのように教えたかを説明しなさい。
3. これらの二人の弟子たちの熱心さから、何を学ぶことができますか。
4. 優先順位を決めるとき、わたしはどれくらい、彼らの模範にならっているでしょうか。
5. わたしは自分の義務において、組織された教会の一部として、どのようによりよく奉仕ができるでしょうか。

品性における変化

暗唱聖句：「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。(ヨハネによる福音書 20:27 下句)

「わたしたちの救い主は、これらの終わりの時代に、信じるのが遅い人々への奨励の言葉は一言もない。」(教会への証 2 巻 696)

推奨文献： 教会への証 1 巻 328-338
同上 4 巻 231-233

1. トマスの不信仰

日 / 11 月 23 日

- a. トマスは、キリストの復活の知らせに対して、どのように反応しましたか。そしてなぜ、わたしたちはこの態度を克服するよう命じられているのですか (ヨハネによる福音書 20:24, 25; テモテへの第二の手紙 2:8)。

「イエスが初めて弟子たちに二階の広間で会われたとき、トマスはいつしよにいなかった。トマスはほかの人たちのうわさを聞き、イエスがよみがえられたという十分な証拠を示されたが、憂うつと不信が彼の心を満たしていた。弟子たちがよみがえられた救い主のふしぎな出現について語るのを聞くと、彼はますます深い絶望に沈んだ。もしイエスが実際に死人の中からよみがえられたとしても、字義通りの地上の王国についても望みはあり得ないのだった。また、主が自分を除いてほかのすべての弟子たちにあらわれたもうたと考えることは、彼の虚栄心を傷つけた。彼は信じないことを決心した。そして、一週の間じゅう自分のみじめさを思いつづけた。……

彼は、兄弟たちの目で見ようとも、彼らのあかしにもとづいた信仰を働かせようともしなかった。彼は熱烈に主を愛していたが、彼の心と思いはねたみと不信に占領されていた。」(各時代の希望下巻 345)

「サタンは、さまざまな疑いをほのめかすためにすぐそばにいる。しかしもしあなたが目を信仰のうちに開くなら、信じるための十分な証拠を見出すであろう。しかし、神は決してだれからも、すべての疑いの理由を取り除くことはなさない。……イエスは決して不信仰をたたえたことはなかった。このお方が疑いをおほめになったことはなかった。」(教会への証 4 巻 232, 233)

2. 疑う魂を取り扱う

月/11月24日

- a. イエスが愛をもってご自分の疑っている弟子の信仰を強化された方法から、何を学ぶことができますか (ヨハネによる福音書 20:26-28)。

「幾人かの弟子たちは、いまあのなつかしい二階の広間を一時の住居とし、夜になるとトマス以外の全部がそこに集まった。ある晩、トマスはほかの弟子たちに会おうと決心した。彼は、信じていないにもかかわらず、あのよい知らせがほんとうであるようにというかすかな望みをいだいていた。弟子たちは夕食をしながら、キリストが預言を通して彼らにお与えになった証拠について語った。『戸はみな閉ざされていたが、イエスがいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた』(ヨハネ 20:26)。

イエスはトマスをふりかえって、『あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい』と言われた(ヨハネ 20:27)。このことばは、イエスがトマスの思いとことばを知っておられる証拠であった。この疑い深い弟子は、仲間のどれも一週間イエスに会っていないことを知っていた。彼らが自分の不信を主に告げたはずがない。彼は、目の前のおかたが主であることに気づいた。彼はそれ以上の証拠を望まなかった。彼の心はよろこびでおどった。彼はイエスの足下に身を投げて、『わが主よ、わが神よ』と叫んだ(ヨハネ 20:28)。」(各時代の希望下巻 345,346)

- b. 今日現代の真理—預言の霊に関することも疑う人々を、どのように扱うべきですか (テモテへの第二の手紙 3:10)。

「ある人は、出版された幻を受け入れることができ、木をその実によって判断することができることを示された。他の人々はトマスのように疑っている。彼らは出版された証を信じることも、他の人々の証を通して与えられる証拠を受け入れることもできず、自分自身で証拠を見て、証拠を得なければならないのである。そのような人をわきによけてはならない。かえって彼らが自分たちの立場を見出し、賛成か反対か確立されるまで、彼らに対して長い忍耐と兄弟愛を働かせなければならない。もし彼らが自分の知らない幻に対して戦うなら、もし彼らが自分たちの経験のないものにまで反対を押し進め、幻が神から来たものだと思える人が集会でそれらについて語り、幻を通して与えられた教えで自らを慰めていることにいら立ちを感じるとしたら、教会は彼らが正しくないことを知ることができる。神の民は、そのような不満を持つ人々にへつらったり、譲ったり、彼らの好きにさせたりすべきではない。」(教会への証 1 卷 328)

3. 疑う者の信仰を立てる

火/11月25日

- a. イエスはトマスにどのような優しい譴責を向けられましたか(ヨハネによる福音書 20:29)。イエスが疑う使徒を扱われた方法から、どの教訓を学びますか。

「もしトマスが兄弟たちのあかしを聞いて信ずる気持ちがあったら、彼の信仰はもっとキリストによろこばれたのであった。もし世の人々が、いまトマスの例に従うなら、信じて救いにいたる人はいないだろう。キリストを受け入れる者はみな、ほかの人々のあかしによらねばならないからである。

疑いにおちいつている多くの人は、もし、トマスが仲間から与えられたような証拠を自分たちにも与えられるなら、自分たちは信ずるのだがと言いわけをする。彼らは、その証拠が与えられているだけでなく、もっと多くが与えられていることをみとめない。トマスのように、疑いの原因が全部のぞかれるのを待っている人々の多くは、その願いが決して実現されないであろう。彼らの不信はだんだん固まってしまっているのである。暗い面を見たり、つぶやいたり、不平を言ったりするように自分自身を教育する人たちは、自分のやっていることがわからないのである。彼らは、疑いの種をまいているのであって、疑いの収穫をかりとることになる。こうして多くの人たちは、信仰と確信が最も必要な時に、望むことも信じることもできない無力な自分に気がつくのである。

トマスのとり扱いにおいて、イエスは弟子たちに一つの教訓をお与えになった。イエスの模範は、信仰が弱くて、疑いをはっきり示す人々をどのように扱わねばならないかを教えている。イエスはトマスをしかりつけて、おさえつけてしまったり、彼と議論したりなどなさらなかった。イエスは疑う者にご自身をお示しになった。トマスは、不当にも自分の信仰の条件を規定したが、イエスは、その寛大な愛と思いやりによって、すべての障壁を打破された。不信は、議論によってはめったに征服されない。それはむしろ、自己を固く守り、新しいささえと口実を見いだす。しかしイエスが、十字架につけられた救い主として、その愛とあわれみのうちにあらわされる時、かつては固かった多くの口から、『わが主よ、わが神よ』とのトマスの告白が聞かれるであろう。」(各時代の希望下巻 346、348)

- b. キリストのしるしと奇跡は、なぜ記録されたのですか(ヨハネによる福音書 20:30, 31)。

「神は、わたしたちに、信仰の基礎を置くに足る証拠を十分与えられた上でなければ、信じるようにはお求めにならない。神の存在も、品性も、また、み言葉の真実性もみな、わたしたちの理性に訴えるあかし、しかも多くのそうしたあかしによって確立されている。けれども、神は、疑う余地を全く取り除かれたのではない。わたしたちの信仰は、外見的なものの上に築くのではなく、証拠の上に築くのでなければならぬ。」(キリストへの道 145)

- a. どのような状況下で、イエスは三度目にご自分の弟子たちに、ご自身を表されましたか（ヨハネによる福音書 21:1-3）。
- b. 弟子たちが漁をしている間、イエスはどのように彼らに近づき、彼らに何と 말했습니다か。またその結果は何でしたか（ヨハネによる福音書 21:4-6）。

「イエスが彼らに網を舟の右側におろすように命じられたことには目的があった。右側には、イエスが岸に立っておられた。それは信仰の側であった。もし彼らがイエスとつながって働くなら、すなわちイエスの神としての力が彼らの人間的努力と結合するとき、彼らはかならず成功するのであった。」（各時代の希望下巻 352）

- c. 弟子たちの目が開かれ、イエスを認めたとき、何が起きましたか。そのあとに続いた主とペテロの会話を述べなさい（ヨハネによる福音書 21:7-17）。

「ペテロはかつて、『たとい、みんなの者があなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません』と断言したことがあった（マタイ 26:33）。しかしこんどは、彼はもっと真実に自分自身を評価していた。ペテロは、『主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです』と言った（ヨハネ 21:15）。わたしの愛は兄弟たちの愛よりも大きいのですという誇大な保証はない。彼は自分の献身について自分自身意見を表明しない。……

三度ペテロは公然と主を知らないと言った。そこでイエスは三度ペテロから愛と忠誠心の保証を引き出し、その鋭い質問を、ちょうどさかとげのある矢のように、彼の傷ついた心につきつけられた。弟子たちの集まっている前で、イエスは、ペテロの悔い改めの深さを明らかにし、かつては威張っていた弟子がどんなに徹底的にへりくだった者になったかをお示しになった。」（同上 353、354）

「〔ペテロ〕は、自分自身について、あるいは自分が言わねばならないことについてははっきりした自覚をもたないうちに、いつもすぐ人を矯正したり、自分の思っていることを口に出したりした。しかし悔い改めたペテロはまったくかわった。彼の以前の激しさは残っていたが、キリストの恵みがその熱心さを調節した。彼はもう激越でもなければ、自己を過信することも威張ることもなく、冷静で、落ち着いていて、教えを受け入れた。その時彼はキリストの羊の群ればかりでなく小羊も飼うことができた。」（同上 355、356）

- a. ペテロに関して、イエスはどのような預言的な宣言をなさいましたか（ヨハネによる福音書 21:18, 19）。この預言は後に、どのように成就しましたか。

「〔ペテロ〕は、キリストの足がどんなに高いところ、どんなに深いところへ進んで行かれるのかすこしも知っていなかった。ペテロは試練がやってきたとき失敗したが、ふたたびキリストに対する彼の愛を証明する機会を与えられることになった。ペテロが最後の信仰の試練のために力づけられるように、救い主は、彼の将来をお示しになった。有用な人生を送って、老齢が体力に影響を及ぼしはじめたとき、ペテロはほんとうに主のあとに従うのであった。……

このようにイエスは、ペテロがどんな死に方をするかをお知らせになった。イエスはペテロが十字架上で手をひろげることまで予告された。そしてふたたびイエスは、この弟子に、『わたしに従ってきなさい』と言われた（ヨハネ 21:19）。ペテロはこのように示されたことによって落胆しなかった。彼は主のためにどんな死でもよこんで受けたいと思った。」（各時代の希望下巻 357）

「ペテロはユダヤ人であり外国人として、むちで打たれて十字架につけられる刑が宣告された。この恐ろしい死を目前にして、使徒は、イエスの裁判のときにイエスを拒んだ自分の大きな罪を思い出した。かつては十字架を認める準備のできていなかった彼は、今、福音のために命をささげることを喜び、ただ、主を拒んだことのある自分は、主と同じ死に方をするという大きな栄誉には値しないということしか思わなかった。ペテロはその罪を心から悔いて、キリストにより既にゆるされていた。羊と群れの小羊を養う高い使命が彼に与えられていたことがそれを示している。しかし彼は自分を決してゆるすことができなかった。最後の恐ろしい場面の苦しみを考えてさえも、彼のはげしい悲しみと後悔の念は軽くならなかった。最後の願いとして、彼は頭を下に向けて十字架に釘づけされるようにと執行人に頼んだ。この願いは聞き入れられて、この方法で偉大な使徒ペテロは死んだ。」（患難から栄光へ 下巻 240）

個人的な復習問題

金 / 11月28日

1. わたしはどのようにトマスと同じ不機嫌さをもつ危険に陥るかもしれませんか。
2. イエスが疑うトマスを扱われた方法から何を学ぶべきですか。
3. なぜ愛は、論争よりも説得力があるのですか。
4. 魚の奇跡を行われたキリストのご目的は何でしたか。
5. ペテロの改心後の態度の変化を述べなさい。

第一安息日献金 21M メディア・スタジオ改築

今日、大勢の人々の関心はどこにあるでしょうか？それはスクリーンです。スクリーンは様々な形や大きさがあり、世界中に情報を発信するために欠かせない技術となっています。スマートフォン革命の始まり以来、これらのスクリーンはかつてないほど個人的なものとなっています。今日、世界の 80 億人の半数を優に超える人々がポケットにスクリーンを持ち歩き、周囲の世界をナビゲートし、交流するためにますますスクリーンに頼っています。特に注目すべきは、これらのスクリーンが世界を覗き込む個人的な窓、つまり人生の最も深い側面にかかわる知識や「真理」を得る手段となっていることです。ですから、毎日無数の目が切望して覗き込むこれらの窓の向こう側に、人生にとって最も大切な真理であるイエス・キリストの福音を見つける絶好の機会があるのです。



第 21 ミッションナリーは、北米における SDA 改革運動初のメディアミニストリーです。現代のコミュニケーション手段を用いて福音のメッセージを明確かつ効果的に伝えることを目的として設立されました。私たちは、21M 教会アプリでデジタルトラック、ポッドキャスト、ビデオ、音楽、その他のマルチメディアリソースを制作・公開し、現代に即した方法でイエスの福音を伝えることを目指しています。現在、メディアスタジオの建設と設備の整備を進めており、この活動の大幅な拡大に大きく貢献するでしょう。アプリをダウンロードし、私たちの使命について詳しくは、www.21stmissionary.org をご覧ください。

「わたしたちの父祖たちの上に注いだよりも大きな光がわたしたちの上に輝いている。父祖たちがなしたのと同じ奉仕、同じ働きを捧げていたのでは、神に受け入れられることも、尊ばれることもできない。彼らのように、わたしたちが受け入れられ、尊ばれるためには、彼らの忠実さと熱心さを模倣しなければならない。彼らが自分たちの光を活用したように、わたしたちの光を活用しなければならない。そして彼らがもしわたしたちの時代に生きていればしたはずのことをしなければならない。」(教会への証 1 巻 262)

「人々のいるところに届けるために、研究し、計画し、方法を考案しなさい。わたしたちはありきたりの事態から抜け出すために何かをしなければならない。注目を集めなければならない。死に物狂いで真剣にならなければならない。」(伝道 122, 123)

本日の第一安息日献金は、宣教資料を制作するメディアスタジオの完成に充てられます。皆様の温かいご支援は、福音を世界に伝えるという私たちの使命を継続していく上で、大きな力となります。

メディア支部の北カリフォルニア会議

愛された弟子

暗唱聖句：「このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。この永遠のいのちは、父と共にいましたが、今やわたしたちに現れたものである。」（ヨハネ第一の手紙 1:2）

「愛された弟子ヨハネはほかのすべての仲間たちにまさって、このすばらしいいのちの力に屈服した。」（各時代の希望上巻 311）

推奨文献： 教会への証 5 巻 236-248

1. ヨハネの品性

日 / 11 月 30 日

- a. ヨハネのうちにどのような深刻な品性の欠点が見られましたか（マルコによる福音書 3:17）。

「ヨハネは、のちの経験にあらわれているような美しい品性を生まれつき持っていたのではなかった。彼には生まれつきのひどい欠点があった。高慢で、身勝手で、名誉欲が強かったばかりでなく、激しい性質で、侮辱されると憤慨した。彼とその兄弟たちは『雷の子』と呼ばれていた。短気、復讐心、批判的精神といったようなものがすべてこの愛された弟子の中にあった。」（患難から栄光へ下巻 242）

- b. どの経験がヨハネとその兄弟ヤコブの報復的な性質をはっきりと表していましたか（ルカによる福音書 9:51-56）。

「強制的にキリストを受け入れさせることは、キリストの使命にはない。それはサタンであり、良心を強制しようとするのはサタンの霊に踊らされている人々である。悪天使と同盟する人々が時々、正義に対する熱意をよそおい、自分たちの宗教的な考えに改心させようと仲間を苦しめている。しかしキリストは常にあわれみを示され、愛をお示しになって導こうとしておられる。キリストは人の心に競争相手を認めることも、生半可な奉仕を受け入れることもおできにならない。ただ、主は自発的な奉仕、愛に強いられて気持ちよく服従する心を望まれる。」（同上 243）

2. 優位性を渴望する

月/12月1日

- a. 使徒たちの間で深刻な不和を生じさせかけたヨハネに関わる嘆願から、わたしたちは何を学ぶ必要がありますか（マルコによる福音書 10:35-37; 9:35）。

「ある時、ヨハネは自分たちの中でだれが一番偉いかということに関して何人かと口論をしていた。彼らは自分たちの言葉が主人の耳に入ることを意図していなかった。しかしイエスは彼らの心を読まれ、ご自分の弟子たちに謙遜の教訓を与える機会とされた。このお方のみ言葉を聞く小さいグループのためばかりでなく、終わりの時代にいたるまでこのお方に従う人々すべての益となるために記録されるのであった。〔マルコ 9:35 引用〕。

キリストの精神を持っている人々は他の兄弟たちより上の地位を占めようとする野心がない。神の御目に偉大なのは、自分の目には小さい人々なのである。」（きよめられた生涯 55, 56)

- b. そのような嘆願を引き起こすことになった誤った希望は何でしたか（使徒行伝 1:6）。

「キリストが神の国の本質について繰り返し指導しておられたにもかかわらず、この若い弟子たちは、人々の願いに従って王座と王の力を獲得される方として、いまだにメシヤに希望を抱いていた。」（患難から栄光へ下巻 244)

- c. イエスはヨハネや他の弟子たちを、どのように正されましたか（マルコによる福音書 9:38-41）。

「ヤコブとヨハネが、伝道の仕事を始めたばかりのころ、ある人に会った。その人は、キリストに従う者として認められていないのに、キリストのみ名によって悪魔を追い出していた。弟子たちはその男にその働きを禁じた。そしてこうすることが正しいと思った。しかしこの問題をキリストの前に出したとき、キリストは彼らをしかって、言われた……どんな方法でもキリストに親しみを示した者を拒絶すべきではなかった。弟子たちは狭い、排他的な精神にふけることなく、彼らが主の中に見てきたような広大な同情を示さなければならない。ヤコブとヨハネはこの男をしかることで、主の名誉を心にかけていると思っていた。しかし彼らは、自分たちのために嫉妬しているのだということがわかりはじめた。ヤコブとヨハネは自分たちの誤りを認めて、主の叱責を受け入れた。」（同上 246)

- a. ヨハネがキリストのご品性を見たとき、ヨハネに何が起こりましたか。またこのことから、何を学ぶべきですか（ヨハネの第一の手紙 1:2, 3）。

「一日一日、自分自身の激しい気性と対照的に、彼は、イエスの柔和と寛容とを見、謙遜と忍耐についてイエスの教訓を聞いた。彼は天来の感化に向かって心を開き、救い主のみことばをきく者となるばかりでなく、これを行う者となった。自我はキリストのうちにかくれた。彼はキリストのくびぎを負い、キリストの重荷を負うことを学んだ。

イエスは弟子たちをしかり、彼らに警告し、また注意された。しかしヨハネとその兄弟たちは、イエスから離れなかった。彼らは、しかられたにもかかわらず、イエスをえらんだ。救い主は、彼らに欠点とまちがいがあるからといって、彼らから離れるようなことをなさらなかった。彼らは、終りまでイエスと試練を共にし、イエスの生活から教訓を学んだ。キリストを見ることによって、彼らの品性が一変した。」（各時代の希望上巻 382）

「個人の品性の中に顕著な欠点があるかもしれないが、イエスの真の弟子となるとき、神の恵みの力が、その人を新しい被造物にする。キリストの愛がその人を変え、聖化する。しかし、人々がクリスチャンだと公言するとき、彼らの宗教はあらゆる生活に関わることに於いて彼らを少しもより良い男女一気質と品性におけるキリストの生きた代表者—にしていけないのであれば、彼らはキリストのものではない。」（きよめられた生涯 55）

- b. イエスの愛によって変えられ、ヨハネはすべての信徒たちのために、どのメッセージを持っていましたか（ヨハネの第一の手紙 2:3-5; 3:18; 4:7, 16）。

「ヨハネは、愛の精神を実行するときにやってくる高尚な特権を信者に理解させようとした。このあがないの力は、心を満たして、他のすべての動機を支配し、その人を世の墮落した感化の及ばないところに高める。そしてこの愛が十分に力を発揮できるようになり、また、人生における原動力になったとき、神と、彼らに対する神の取り扱いとに対する信頼と確信は完全になる。そうして彼らは、現在と永遠の幸福のために必要なものをすべて神から受けることができることを知って、信仰の確信に満ちて神のもとに来ることができた。」（患難から栄光へ下巻 255）

4. わたしたちはどうだろうか？

水 / 12月3日

- a. ヨハネの場合のように、コリントにある教会においてどのような危険な悪がはびこっていましたか？また今日、同じようにたやすくわたしたちを支配することもあり得ますか（コリント人への第一の手紙 3:1-3）。

「主はご自分の教会に大いなる祝福を授けてこられた。正義は、教会がタラントを利子と一緒にもどすことを命じる。教会が守るようにと委託される真理の宝が増すにつれて、その責任も増す。しかし、これらの賜物を活用し、完全へと進む代わりに、教会は初期の経験において達成したところから落ちてしまった。その霊的な状態は徐々に変化し、ほとんどわからなくなった。教会が世の賞賛と友情を求め始めたとき、その信仰は減少し、その熱心さは活気がなくなり、熱い献身は死んだ形式主義に取って代わった。世に向かって進む一步一步は、神から離れる一歩であった。誇りと世俗の野心をいだいて、キリストの霊が離れていき、競争、不和、紛争が入り込んで、教会の気をそらし、弱くした。」（教会への証 5 巻 240, 241）

「妬みと紛争によって気が散っている思いが、神のみ言葉の深い霊的な真理を把握することは不可能である。」（同上 241）

- b. わたしたちはどのように、これより高い召しへと招かれていますか（ガラテヤ人への手紙 5:13-16）。

「神のご計画の中には利己的な競争の余地はない。」（教育 267）

「クリスチャンは、妬みや競争の精神を抑制することを宗教的な義務として見なすべきである。彼らは自分自身の品性や偉業が陰に薄れるように思えても、自分の兄弟たちのすぐれた評判や繁栄を喜ぶべきである。サタンが天から追放されたのは、その心のうちにいっていた誇りと野心のためであった。これらの悪は、わたしたちの墮落した性質に深く根ざしている。そしてもし取り除かないならば、すべての良い高尚な資質に影を投げかけ、その憎むべき実として、妬みや紛争を結ぶのである。

わたしたちは、偉大さよりも真の善を求めるべきである。キリストの思いを持っている人々は、自分自身について謙遜な見解を持っている。彼らは教会の純潔と繁栄のために労し、兄弟の間に不和を生じさせるよりは、自分自身の利益や願望を犠牲にする用意ができています。」（教会への証 5 巻 242）

- a. わたしたちの教育はどのように競争心にふける誘惑から、わたしたちを助け、守ることができますか（コリント人への第二の手紙 10:12; ピリピ人への手紙 2:3; コロサイ人への手紙 2:8）。

「わたしたちの学習施設では世の感化力に反して作用する感化力が発揮されるべきである。そして、食欲や感覚を喜ばせる利己的な満足や誇り、野心、衣服や誇示への愛着、賞賛やへつらいを好むこと、また高額な奨学金の補償として高い賞与や名誉のために争うことにふけるよう奨励することがあつてはならない。これらはみな、わたしたちの学校で阻止されるべきである。これらのことを避けることは不可能であるが、それでも公立学校に彼らを送るならば、そこで日々彼らの道徳を汚すものに接触させることになる。世のいたるところを通じて、あまりにも家庭での訓練がなおぎりにされており、公立学校にいる子供たちは大部分、放蕩であり、悪徳へ落ち込んでいる。

わたしたちが民としてこの問題においてなすべき働きは、学校を設立し、イエス・キリストが雲の柱からご自分の民の働きとして命じてこられたように、わたしたちの子供や青年たちを神の戒めに関して訓練し、教育することである。世があらわす神の律法への無視は、神の律法を守っていると公言する人々の道徳を汚していた。しかし、わたしたちはアブラハムの模範に従うよう召されている。彼について、主は言われた、『わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである。』

アブラハムは、自分の家庭において物事の新しい秩序を持ち込んで成功するためには、自分の国と父の家とを離れ、異国の地で滞在しなければならなかった。」（クリスチャン教育の基礎 286）

個人的な復習問題

金 / 12月5日

1. キリストはわたしのうちにあるどの品性の良くない特質を変えようと切望しておられますか。
2. 他の人々がわたしを正しく評価していないように見えるとき、わたしはどのように応じるべきですか。
3. 変えられたヨハネに主たる焦点をあてることから、何を学ぶことができますか。
4. なぜ競争の精神は今日、大問題なのですか。
5. 子供の教育方法は、どのように生涯に大きな違いをもたらすことができますか。

偉大な任務

暗唱聖句：「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことは守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」（マタイによる福音書 28:19、20）

「福音の任命は、キリストの国の宣教大憲章である。弟子たちは人々のために熱心に働き、すべての人々に恵みの招待状を渡さなければならなかった。彼らは人々がやってくるまで待つのではなく、使命を携えて人々のところに行かなければならなかった。」（患難から栄光へ上巻 22）

推奨文献： 教会への証 6 巻 124, 125
294-298

1. ガリラヤで会う

日 / 12月7日

- a. キリストの招きに応じて、弟子たちはどこへ行きましたか（マタイによる福音書 28:10, 16）。この集会には何人いましたか（コリント人への第一の手紙 15:6）。

「この任命は、キリストが十二人の弟子たちと二階の広間で会合されたときに与えられたのであったが、いまはもっと多数の者に与えられることになった。ガリラヤの山での集まりに、呼び集められるかぎりすべての信者が集められた。……

定められた時間になると、およそ五百人の信者たちが山の上いくつかの小さなかたまりになって集まり、キリストがよみがえられてからお会いした人たちから聞けるだけのことを聞こうと熱心に待った。弟子たちはこの群れからあの群れへと歩きまわって、自分たちがイエスについて見たり聞いたりしたことを語り、またイエスが自分たちにそうされたように、聖書から説き聞かせた。トマスは自分が不信仰だった話を物語り、彼の疑いが一掃されたことを語った。突然イエスが彼らの間に立たれた。どこから、どうやってこられたのかだれにもわからなかった。集まっていた人々の多くは、これまでイエスにお会いしたことがなかったが、その手と足に十字架につけられた傷跡を見た。イエスの顔は神のみ顔のようだったので、彼らはイエスを見て、おがんだ。」（各時代の希望下巻 361、362）

2. 喜びをもたらした命令

月/12月8日

- a. どの命令に大きな影響力がありましたか(マタイによる福音書 28:19, 20(上句))。

「弟子たちはすでにイエスが語られる前におがんでいたが、死にとじられていたくちびるから出るイエスのことばには特別な力があって彼らを感動させた。イエスはいまやみがえられた救い主であった。」(各時代の希望下巻 364)

「天のみ座からほんの一步のところ立って、キリストは、弟子たちに任命をお与えになった。『わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた』とキリストは言われた。『それゆえにあなたがたは行って、すべての国民を……教えよ』『全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ』(マタイ 28:18－20、マルコ 16:15)。このことばは、弟子たちがその意義を把握するように、何度も何度もくりかえされた。天の光は、身分の高い者にも低い者にも、富める者にも貧しい者にも、地のすべての住民の上に、明るい強い光線となって輝くのであった。弟子たちは世を救う働きにあがない主と共に働く者となるのであった。」(同上 361)

- b. キリストのご命令には、どの保証が含まれていましたか(マルコによる福音書 16:16)。

「山の上でのキリストのことばは、人類のためのキリストの犠牲が十分に完全であるということを告げていた。あがないの条件は果たされた。イエスがそのためにこの世にこられた働きは達成された。イエスは、天使たちと支配と権威からあがめられるために神のみ座のもとへ行かれる途中であった。イエスは仲保者としての働きにおはいりになったのだった。無限の権威を帯びて、キリストは、弟子たちに任命をお与えになった。」(同上 364)

- c. どの言葉をもって、使徒ペテロはこの基本的な真理を確認しましたか。またその結果は何でしたか(使徒行伝 4:12)。

「神の知恵であり力であられるイエス・キリストが、あらゆる話の主題であった。キリストのみ名一天下に与えられた、人々を救いうる唯一の名一は、彼らによってあがめられた。彼らがよみがえられた救い主、キリストの完全さを宣べ伝えると、彼らの言葉が人々の心を動かし、人々を福音へと導いた。救い主のみ名をのしり、その力を軽蔑していた多くの人々が今、十字架にかけられたかたの弟子であると告白した。」(患難から栄光へ下巻 302)

3. 「いっさいの権威を授けられた」

火 / 12月9日

- a. キリストの「いっさいの権威を授けられた」という言葉は何を意味しますか(マタイによる福音書 28:18)。

「その権威は年月がたつにつれて減ったり、溢れるばかりの恩恵のたえない活動によって尽きてしまったりするようなものではない。イエスを信ずるすべての者にとって、彼はいまなお生ける救い主である。」(各時代の希望中巻 34)

「わたしたちがキリストのうちにしっかりと錨を下ろすとき、人間ではわたしたちから取り去ることのできない力を持つ。なぜであろうか。なぜなら、わたしたちが神性にあずかり、世にある欲のために滅びることをまぬかれるから、すなわち、人類の頭として立ち、罪のしみも汚れもない品性を発達させるために、人間の衣をまとうてこの地上に来られたお方の性質にあずかるからである。

なぜわたしたちのうち多くの者がこれほど弱く、役に立たないのだろうか。なぜなら、わたしたちが自己を見て、自分自身の気質を研究し、キリストとそのご品性を研究する代わりに、どうしたら自己のために、自分の個性のために、自分の特徴のために余地を作れるかを思案しているからである。」(教会への証 9 巻 187)

- b. わたしたちはどのようにキリストから力を受けますか(ピリピ人への手紙 4:13; ヘブル人への手紙 12:1, 2)。

「神のみことばは魂に受け入れられて、思想を形成し、品性の発達の要素となる。

信仰の目をもってイエスをたえずながめることによって、われわれは強められる。神は、飢えかわいているご自分の民に最もとうとい啓示をお与えになる。彼らはキリストが自分自身の救い主であることを発見する。キリストのみことばを食べるときに、彼らは、それが霊でありいのちであることを知る。みことばは、生れながらの世俗的な性質を滅ぼし、イエス・キリストのうちにある新しいいのちを与える。聖霊は、助け主として魂にくだる。人を生れ変らせる神の恵みの力によって、神のみかたちが、弟子のうちに再現され、彼は新しい人間となる。愛が憎しみに入れ代り、心は神のみかたちにかたどられる。『神の口から出る一つ一つの言で生きる』というのは、このことである(マタイ 4:4)。これが天からくだるパンを食べることである。」(各時代の希望中 141)

- a. 「行って」また「教える」との言葉には、何が示唆されていますか（マタイによる福音書 28:19（上句））。

「われわれの目をかなたの国々に向けるようにと訴えられている。キリストはへだての壁すなわち国籍というへだての偏見を打破し、全人類家族への愛を教えておられる。主は、人間の利己心が定めたせまい社会から人々を高められる。主は、地域的な境界線と人間のつくった社会的な差別を廃止される。キリストは隣人と他人、友人と敵の区別をされない。困っている魂をみな兄弟とみなし、世界を働き場とみなすようにと、主は教えておられる。」（各時代の希望下巻 370）

- b. イエスは、伝道の任務にどの約束を添えましたか。またそれはわたしたちにとって何を意味していますか（マタイによる福音書 28:20（下句））。

「キリストが共にいてくださると教会に約束されているのは、そのみわぎをなすことによってである。」（同上 373）

「働きの遂行にイエスは十分な道を備え、その成功の責任をご自身が負われた。彼らがイエスのことばに従い、イエスにつながって働くかぎり、失敗することはないのであった。すべての国民に行きなさいと、イエスは彼らにお命じになった。人の住むかぎりどんな地球の果てまで行っても、わたしがそこにいることを知りなさい。信仰と確信をもって働きなさい。わたしがあなたがたを捨てる時は決してないのだから。

救い主が弟子たちにお与えになった任務には信者の全部が含まれていた。これには世の終わりにいたるまですべてのキリスト信者が含まれている。救霊の働きが牧師だけに負わされていると考えるのは重大な誤りである。天の靈感を受けた者はすべて福音をのべ伝える責任が負わされる。キリストの生命を受ける者はみな同胞の救いのために働くように任命される。教会はこの働きのために設立されているのであって、聖なる誓約によって教会に加わるものはみなそのことによってキリストと共に働く者となることを誓ったのである。」（同上 368）

「あなたはキリスト共に働く共労者であろうか。あなたはこれのお方のために、苦しみ、犠牲、試練に耐えることができるであろうか。青年や誤っている者たちのために良いことをなす機会がある。もしあなたが言葉や態度に神から離れていることを示す人を見たら、その人を責めてはならない。彼を非難することはあなたの仕事ではない。かえって、彼を助けるために、その人のかたわら近くに行きなさい。」（教会への証 6 巻 125）

5. 福音を分かち合う

木 / 12月11日

- a. 福音について、聖書の定義は何ですか（ローマ人への手紙 1:16, 17）。

「許しと義認は一つであり同じことである。信じる者は信仰によって反逆者、すなわち罪とサタンの子供という立場から、キリスト・イエスの忠実な臣民という立場へと移る。それは生まれつきの善のゆえではなく、キリストが養子縁組によって彼をご自分の子として受け入れて下さるがゆえである。罪人は自分の罪の許しを受けるが、それは自分の身代わり、担保であるお方がこれらの罪を負ってくださったからである。主は御父に語って『これはわたしの子です。わたしは彼の身代わりとなって彼の罪のために苦しみを受けたので、わたしの生命保険証書—永遠の命—を与えて、彼を死の有罪宣告から執行猶予にしました。これはわたしの愛する子です』と言われる。こうして許され、キリストの美しい義の衣を着せられた人は、神の前に欠点のない者として立つのである。

罪人は間違いを犯すかもしれないが、憐れみなしに捨てられることはない。しかしながら、彼の唯一の希望は、神への悔い改めと主イエス・キリストを信じる信仰である。」（キリストを映して 74）

- b. 使徒パウロは、なぜ自分が負債をおっているとみなしたのですか（ローマ人への手紙 1:14, 15）。

「どういう意味で、パウロはユダヤ人にもギリシャ人にも果たすべき責任を負ったのだろうか。彼にはキリストのすべての弟子に与えられていると同じ任務が与えられていた。〔マタイ 28:19, 20 引用〕。キリストを受け入れることで、パウロはこの任命を受け入れた。彼はすべての階級の人々のために—ユダヤ人とギリシャ人、学問のある者と無学な者、高い地位についている人々と人生の最も低いところを歩いている人々のために—働く責任が自分にあることを認識した。」（SDA バイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 6 巻 1067）

個人的な復習問題

金 / 12月12日

1. わたしの主は、具体的にわたしに、わたしの領域において、どのような任務をお与えになりましたか。
2. わたしはなぜ、真の意味において満ちみちたキリストの力を受けていないのですか。
3. 主は今日、わたしにどの課題と保証を差し出しておられますか。
4. キリストの御名は、このお方に従う者にとって何を意味しますか。
5. 「キリストを見る」とは何を意味しますか。

実地的な遠征

暗唱聖句：「あなたの家族のもとに帰って、主がどんなに大きなことをしてくださったか、またどんなにあわれんでくださったか、それを知らせなさい」。(マルコによる福音書 5:19 下句)

「弟子たちは自分たちのいるところから働きを始めるのであった。」(各時代の希望下巻 369)

推奨文献： 教会への証 6 巻 254-260;
同上 1 巻 412

1. 多くの国籍が集まる

日 / 12 月 14 日

- a. いつ、キリストの弟子たちのために約束された特別な力が、最初に著しく成就するのが見られましたか (使徒行伝 2:1-4)。

「聖霊は炎の舌の形をとって、集まっていた人々の上にくだった。これは、そのとき弟子たちにさずけられた賜物の象徴であった。そして彼らは、それまで知らなかった他国の言葉で流暢に話すことができた。その炎は、使徒たちが働くときの燃えるような熱意と、その働きに伴う力を現した。」(患難から栄光へ上巻 34)

- b. なぜその時に、言葉の賜物が必要とされていたのですか (使徒行伝 2:5-11)。

「ユダヤ人たちは離散された期間に、人が住むほとんどすべての場所へ散らされ、異境の生活の中でさまざまな違った国語を話すことを学んでいた。この時、これらのユダヤ人の多くがエルサレムに来て、その時行われていた宗教の祭りに出ていた。そこにはあらゆる国語を話す人々が集まっていた。このように言葉がいろいろ異なっていたことは、福音宣伝のためには非常な妨げとなったはずであった。そこで神は、不思議な方法で弟子たちの不足を補われたのである。聖霊は彼らが一生かかってもなし遂げられないことを彼らのためになさった。」(同上 34、35)

- a. 使徒は、外国語で話す本物の賜物について、なんと述べていますか（コリント人への第一の手紙 12:28, 30）。今日、これはどのように当てはまりますか。

「わたしたちの間には、苦勞や時間をかけずに外国語を学び、自ら他の国々へ真理を宣布する資格を身につける者がいる。初期の教会では、伝道者たちは奇跡的に彼らがキリストの無尽蔵の富を宣布するよう召された言語の知識が授けられた。そしてもし神が当時そうにご自分の僕たちを助けることを望まれたとすれば、わたしたちは、生来外国語の知識を有している人々、そしてしかるべき励ましがあれば、自分自身の同国人に真理のメッセージを担うであろう人々に資格を得させるわたしたちの努力に、このお方の祝福が宿ることを疑うことができるだろうか。わたしたちは外国の伝道地に入った人々が、自分たちの手の届くところにあるすべてのタラントを利用していただければ、そこにもっと多くの働き人がいたことであろう。……

ある場合には、青年たちが外国語を学ぶ必要があることもあろう。これは、人々と交わり、また同時に毎日ある一定時間を言語の勉強に充てることによって、もっとも成功することができる。しかし、これはその人が伝道地において、またしかるべき訓練があれば働き人になれる人々を教育する準備段階としてのみ実施されるべきである。さまざまな国の人々に母国語で語れる人を奉仕に入るよう勧めることが重要不可欠である。」（福音宣伝者 82, 83）

- b. 神はご自分の僕たちにどのタラントを約束されましたか。またこれらのタラントを発達させるために、何をすべきですか（エペソ人への手紙 2:8; コリント人への第一の手紙 12:7-11）。

「全部の賜物が信者のひとりびとりに与えられるというのではない。……しかしみたまの賜物は、主の働きのためその必要に応じて、どの信者にも約束されている。この約束は使徒たちの時代と同様に今日も固く、信頼に値するものである。」（各時代の希望下巻 370）

「神のみ事業には能力のある人々が必要である。教師や説教者として奉仕するために訓練された人が必要である。学校や大学でわずかな訓練しか受けてこなかった人々がそれなりの成功をもって働いてきた。しかしこれらの人々がもし最初に精神の訓練を修得していたならば、もっと大きな成功をおさめ、もっと有能な働き人になっていたのである。」（福音宣伝者 92）

- a. なぜ伝道学校は、それほど価値ある資源なのですか。まただれでも効果的に福音を伝えようとする人の最初の義務は何ですか (テモテへの第二の手紙 2:15)。

「キリストに魂を勝ち取る働きは、注意深い準備を必要とする。人々は、必要な訓練なく主の奉仕に入って、最高の成功を期待することはできない。機械工、弁護士、商売人、あらゆる取引や職業の人々は、自分が始めようとする仕事の分野で教育を受ける。自ら抜け目なくできる限り有能になろうとする。帽子職人や仕立て屋のところへ行ってみなさい。彼女たちは自分の仕事について完全な知識を得る前にどれほど長い間苦労したかを告げるであろう。建設者は、どのように趣味の良い広々とした建物を計画するかを理解するのに、どれほど長くかかったかを告げるであろう。そしてそれは、どの召しにおいてもすべて人が通る道である。

キリストのしもべが、無限にもっと重要な働きのために準備するにあたり、より少ない勤勉さをあらわすのであろうか。彼らは魂を勝ち取るために用いる方法や手段について、無知であってよいだろうか。男女の永遠の幸福に関わる偉大な主題について、どのように彼らに近づくかを知るためには、人間の性質についての知識、厳密な研究、注意深い考察、そして真剣な祈りが必要である。」(福音宣伝者 92)

わたしたちの灯芯に聖なる火がともされるのは、神の祭壇においてのみである。

.....

神の使命者たちは、もし自分の働きで成功を治めたければ、このお方と長くともまっていなければならない。一人のランカシャーの夫人の話が伝わっている。彼女は、隣人たちが自分たちの牧師の成功に対して理由をあげているのを聞いていた。彼らは、彼の賜物、彼の説教の仕方、彼のふるまいについて語っていた。その老婦人が『いいえ』言った。『それが何かを皆さんに告げましょう。あなたの牧師は、全能者と非常に親密なのですよ。』(同上 255)

- b. キリストの弟子たちが真理のメッセージを広めるために出て行くとき、彼らにどの神聖な保護が約束されていますか (マルコによる福音書 16:18 (上句))。この約束が成就した一つの例を挙げなさい (使徒行伝 28:1-5)。

「[初期のキリスト教時代] のときは、毒殺がしばしば行なわれた。無法な人々は、自分の野心のさまたげとなる人間をこの方法で除くことをちゅうちょしなかった。イエスは弟子たちの生命がこのような危険にさらされることを知っておられた。多くの人は、イエスの証人たちを殺すことを神への奉仕だと思うだろう。そこでイエスは彼らをこの危険から守ることを約束された。」(各時代の希望下巻 367)

4. 病人に奉仕する

水 / 12月17日

- a. イエスはご自分の弟子たちにどの追加的な力をお与えになりましたか。またこの力を認めて、彼らは何と宣言しましたか (ルカによる福音書 9:1; 10:17)。キリストは彼らにどのようにお答えになりましたか (ルカによる福音書 10:20)。

「あなたがたは力を持っていることをよろこばないで、神に依存していることを見落さないようにしなさい。自己満足に陥り、自分自身の力で働くようなことがないように、むしろ主の精神と力で働くように注意しなさい。働きに少しでも成功が伴うと、その手がらを自分自身のものにしがちである。自我とうぬぼれて高慢になり、神が『すべてであり、すべてのもののうちにいます』という印象をほかの人々の心にうつけることができない (コロサイ 3:11)。……自分の弱さをみとめるとき、われわれは、生れつきのものではない力にたよることを学ぶのである。」(各時代の希望中巻 294)

- b. イエスが病人をお癒しになる働きを優先なさったことの結果は何でしたか (ルカによる福音書 4:38, 39; 5:12, 13; 6:6, 10)。

「イエスは、公生涯の間、説教することよりも病人をなおすことに、多くの時間をささげられた。イエスの奇跡は、イエスが滅ぼすためではなく救うためにおいになったというみことばが事実であることを証明した。イエスの義はその前に行き、主の栄光はそのしんがりとなった (イザヤ書 58:8 参照)。どこへ行かれても、イエスの恵みのおとずれが先立った。イエスのお通りになったあとには、イエスからあわれみを受けた人たちが健康をよろこび、新しく与えられた力を試みていた。彼らのまわりに集まった群衆は、主のなさったみわざを、彼らの口から聞いた。イエスの声は、多くの人々がきいた最初の声であり、イエスのみ名は、彼らが語った最初のことばであり、イエスのみ顔は、彼らが仰いだ最初の顔であった。どうしてイエスを愛し、イエスを賛美しないでいられようか。イエスが町々や都市を通りすぎられるとき、彼は、いのちの流れのように、いたるところにいのちとよろこびとをまきちらされた。」(同上 81)

- c. キリストの模範に従って、弟子たちはどのような働きをしましたか (使徒行伝 3:1-7; 9:32-34; 28:8, 9)。

- a. 恩恵期間の終わりまでわたしたちに課せられている遠大な使命は何でしょうか(マタイによる福音書 10:7, 8; マルコによる福音書 5:19; 16:18 (下句); ルカによる福音書 9:1, 2)。

「イエスに従う者は、イエスが働かれたように働くのである。われわれは、飢えた者に食べさせ、裸の者に着せ、苦しみ悩む者を慰めるのである。われわれは、絶望している者に奉仕し、望みのない者に望みを起させるのである。……無私の奉仕にあらわされるキリストの愛は、悪事を行う者を矯正するのに、剣や裁判所よりも効果がある。剣や裁判所は、法律を犯す者に恐怖を与えるのに必要だが、愛の伝道者はそれ以上のことができる。心は、譴責されるとしばしば固くなるが、キリストの愛にふれるととける。伝道者は肉体の病気を軽くすることができるばかりでなく、罪というらい病から魂をきよめてくださることのできる大医師に罪人をみちびくことができる。神は、ご自分のしもべたちを通して、病人や不幸な人たちや悪霊につかれた人たちに、ご自分のみ声をきかせようと計画しておられる。神は、人間というつわを通して、世の人々が知らなかったような慰め主になることを望んでおられる。」(各時代の希望中巻 81、82)

- b. 主の御業が行われるいくつかの方法に同様の影響を及ぼす聖書の原則は何でしょうか(伝道の書 3:1; 8:5)。

「癒しの偽りの働きが、神からのものだと言主張して、起こるであろう。

その理由のために、主はご自分の民に身体的な癒しの働きをみ言葉の教えと結合させて進めるべきとの方法をはっきり明示してこられた。治療院が設立されるべきである。そしてこれらの施設は、純粋な医事伝道の働きを押し進める働き人たちとつながりを持つべきである。」(医事伝道 14)

個人的な復習問題

金 / 12月19日

1. 使徒たちの時代に異言の賜物はなぜ必要だったのでしょうか。
2. わたしはわたしに託されたタラントをどのように用いているのでしょうか。
3. 医事伝道者として他の人々への奉仕をどのように向上させることができますか。
4. どのような状況の下で、イエスは致命的な危険から守ってくださるのでしょうか。
5. どのようにすれば主の目的のためにわたしは自分の有用性を拡大させることができますか。

魂の収穫を歓迎する

暗唱聖句：「道やかきねのあたりに出て行って、この家がいっぱいになるように、人々を無理やりにひっぱってきなさい。」（ルカによる福音書 14:23 下句）

「福音を受けた者はみな、世に伝える尊い真理をさずけられた。神の忠実な民は常に、彼らの財源を神のみ名をあがめるために用い、彼らの才能を神への奉仕に賢く用いた積極的な伝道者であった。」（患難から栄光へ上巻 115）

推奨文献： 教会への証 6 巻 305-312

1. 神の住まいを準備する

日 / 12 月 21 日

- a. 実りのある伝道活動のために必要な霊的な準備について述べなさい（箴言 16:1; 使徒行伝 1:14（上句）; 2:1）。

「最初の弟子たちは出て行ってみことばをのべ伝えた。彼らはその生活にキリストをあらわした。そこで主は彼らと共に働き、『御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった』（マルコ 16:20）。これらの弟子たちは働きのために備えをした。ペンテコステの日の前に、彼らは共に集まって、すべての不和をすて去った。彼らは一つになった。彼らは祝福が与えられるとのキリストの約束を信じ、信仰をもって祈った。彼らは自分たちのためだけに祝福を求めなかった。彼らは霊の救いのために重荷を負った。福音を地の果てまで伝えることになったので、彼らは、キリストの約束された力がさずけられるように求めた。そのとき聖霊がそそがれ、一日に幾千の人々が悔い改めた。

いまでもこれと同じである。人間の空論ではなく、神のみことばをのべ伝えよう。クリスチャンは不和を取り除き、失われた者を救うために神に献身しよう。信仰をもって祝福を求めるときに、それは与えられるのである。使徒時代の聖霊の降下は、『秋の雨』であったが、その結果はすばらしかった。しかし『春の雨』はもっと豊かなものとなるであろう（ヨエル書 2:23 参照）。（各時代の希望下巻 377）

- a. 新しい改心者の群れが安全に教会の隊列に入ることができる前に、教会が完全に克服していなければならない霊的な弊害を述べなさい（ルカによる福音書 21:34; マタイによる福音書 24:48-50; 25:42-45）。

「失われた羊をさがし求めていなくてはならないはずの者から病める小羊のように世話をしてもらわなくてはならない教会がどんなに多いことだろう。しかもそのあいだに、幾百万の人々が、キリストを知らずに滅びつつあるのである。

神の愛は人類のためにはかり知ることのできないほど深く動かされたのに、これほど大きな愛を受けている者たちに表面的な感謝しかないのを見て、天使たちは驚く。天使たちは、神の愛に対する人々の浅薄な認識に驚き、天は、魂に対する人々の無関心さに憤慨している。そのことについてキリストがどう思っておられるか知りたいだろうか。父母は、自分の子供が寒さと雪の中に行き暮れているのに、それを救えたはずの人たちからみすごしにされ、死ぬがままにほうっておかれたことを知ったらどう思うだろうか。彼らはひどく悲しみ、狂気のように憤慨しないだろうか。彼らはその涙のように熱く、その愛のようにはげしい怒りをもって、そうした殺人者たちを攻撃しないであろうか。ひとりびとりの人間の苦難は神の子の苦難であって、滅びつつある同胞に助けの手をさし出さない人々は神の正義の怒りをひき起こすのである。」（各時代の希望下巻 374）

- b. 神の恵みを受けるのにだれが含まれているべきでしょうか（ルカによる福音書 14:23; 歴代志下 6:32, 33）。

「キリストは弟子たちに言われた、あなたがたはわたしが世のために送った自己犠牲の生活を目に見た。あなたがたはイスラエルのためのわたしの努力を目に見た。彼らはいのちを受けるためにわたしのもとにこようとせず、また祭司たちと役人たちはわたしに対して好き勝手なことをし、聖書に預言されていたとおりにわたしを捨てたが、それでも彼らは神のみ子を受け入れる機会がもう一度あるのだ。わたしのもとにきて罪を告白する者をみなわたしが受け入れることをあなたがたは見えてきた。わたしに来る者をわたしは決してこぼみはしない。望む者はだれでも、神とやわらぎ、永遠の生命を受ける。弟子たちよ、あなたがたにわたしはこのあわれみのメッセージをゆだねる。それはまずイスラエルに与えられ、次に諸国、諸国語、諸民族に与えられるのである。それはユダヤ人にも異邦人にも与えられるのである。信じる者はすべて一つの教会に集められるのである。」（同上 366, 367）

3. 失われた人々に手を差し伸べる

火 / 12月23日

- a. 心の底では神を求めている誠実な心を持っている末信者―異邦人や異教徒―たちに対する神の御計画について述べなさい（ヘブル人への手紙 11:6；イザヤ書 56:3-8）。

「各地に散在する地の住民のなかには、バアルにひざをかがめない者がある。夜だけ現れる空の星のように、これらの忠実な人々は、暗きが地を覆い、やみがもろもろの民を覆うときに輝き出るのである。異教のアフリカ、ヨーロッパ、南米のカトリックの国々、中国、インド、海の島々、地のあらゆる暗黒の隅々に、神は、なお、暗黒のただ中に輝き出る選ばれた人々の星空を保っておられる。彼らを通して背信した世界に、神の律法に従うとき得られる人格を改変する力を、明瞭に示しておられるのである。」（国と指導者上巻 156）

「世界中の男女は何かを求めて天を仰いでいる。光と恵みと聖霊を求める魂から、祈りと涙とねぎごとが天にのぼっていく。多くのものは、み国の入口に立って、刈り集められるのを待つばかりになっているのである。」（患難から栄光へ上巻 114）

- b. 神は信じるすべての者にどのような約束を与えておられますか（ローマ人への手紙 10:8-11）。推測とは対照的に信じるとはどういう意味でしょうか（申命記 6:6-9）。

「サタンは、ある種の欺瞞を通して、本物の奇跡に見えるような不思議を行う。それは、エジプトからイスラエル人が救出されたときに、彼らにとって試金石となる問題にしようと望んだものであった。イスラエルのためにモーセに与えられた指示は、わたしたちにとって時宜（じぎ）にかなった教えである。〔申命記 6:6-9 引用〕。

わたしたちが自分の生活を神の戒めへの完全に従ったものとし、神を自分の最高の導き手とみなし、自分の義の希望としてキリストにすぎるとき、神はわたしたちのために働いて下さる。これが信仰の義であり、世俗の人々がすこしも知らず、理解もできない奥義に隠された義である。へびの後に、詭弁と紛争が続く。しかし、勤勉に研究し実践する神の戒めは、わたしたちに天との交わりを開く。そしてわたしたちのために偽物から本物を区別する。この従順がわたしたちのために神のご意志を成し、わたしたちの生活にキリストの生活に見られた義と完全をもたらすのである。」（原稿リ-ス 7 巻 357）

- a. 真の信仰は偽りの信仰とどのように対照的でしょうか（ヤコブの手紙 2:19, 20; ガラテヤ人への手紙 5:6）。

「本物の信仰はいつでも愛によって働く。あなたがカルバリーを見るとき、義務を行わずにしながら、自分の魂をしずめてはならない。自らを落ち着かせて寝るのではなく、イエスを信じる信仰、働く信仰、すなわち利己心というヘドロから魂をきよめる信仰を生むべきである。わたしたちが信仰によってキリストをつかむとき、わたしたちの働きは始まったばかりである。すべての人は活発な戦いによって克服しなければならない墮落した罪深い習慣を持っている。すべての魂は信仰の良き戦いを戦うことを求められている。もしだれかがキリストに従う者であれば、彼は取引において抜け目なかったり、心が頑なだったり、同情に欠けたりすることはできない。その人は言葉において粗暴であることはできない。彼は尊大さや自己評価に満ちていることはできない。横暴になることも、激しい言葉を用いたり、批判したり、責めたりすることはできない。

愛の働きは信仰の行いから芽を出す。聖書の宗教は、継続的な働きを意味する。『そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい』（マタイ 5:16）。自分自身の救いの達成のために恐れおののいて努めなさい。なぜなら、あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。わたしたちは良い行いに熱心で、良いわざを維持するように注意深くあるべきである。そのとき、まことの証人は、『わたしはあなたのわざを知っている』と言われる（黙示録 2:2）。

わたしたちの忙しい活動が、わたしたちに救いを確保するわけではないことは事実だが、わたしたちをキリストに結合させる信仰は魂を活動へと駆り立てる」（レクテッド・メッセージ 2 巻 20）

- b. バプテスマが実際に意味する本当の重要性を説明しなさい（マルコによる福音書 1:4; ペテロの第一の手紙 3:21; ローマ人への手紙 6:4-9）。

「キリストはバプテスマをご自分の霊的な王国の入り口のしるしとなさった。このお方はこれを、御父、御子、そして聖霊の権威の下に認められたいと願うすべての人が応じなければならない明白な条件となさった。人が教会の中に家庭を見出すことができる前に、すなわち神の霊的な王国の敷居をまたぐ前に、彼は神聖な名、『主はわれわれの正義』を受けなければならない（エレミヤ 23:6）。」（教会への証 6 巻 951）

5. 魂の収穫を刈り取る

木 / 12月25日

- a. バプテスマを受ける前の信者の生活には何が明白であるべきでしょうか（使徒行伝 2:38; 8:36, 37; エペソ人への手紙 4:22, 23）。

「バプテスマは、最も厳粛な世の放棄である。御父、御子、聖霊の三重の御名のうちにバプテスマを受ける人々は、クリスチャン生活のちょうど入り口で、公に、自分たちがサタンの奉仕を捨てて、王家の一員、天の王の子となったことを宣言するのである。」（教会への証 6 巻 91）

「〔バプテスマの候補者たち〕が、完全に自分の立場を理解した証拠を示すとき、彼らは受け入れられるべきである。」（牧師への証 128）。

- b. 本物の信者にはどのような約束が、またどのような条件で与えられていますか（マタイによる福音書 1:21; 24:13; ヨハネによる福音書 10:27-29）。

「敵はキリストのみ手から、この方の約束を単純に信頼している者を、決して引き離すことはできない。もし魂が信頼し、従順に働いているなら、心は天の印象を受けやすくなり神の光が差し込み、理解力を啓発し続ける。私たちはキリスト・イエスにあって、何という特権にあずかっているのだろうか。

私たちは主の来臨を期待して、油断なく見張っていなければならない。……一瞬一瞬を忠実に用いなければならない。『最後まで耐え忍ぶ者は救われる。』（神の息子むすめたち 351）

個人的な復習問題

金 / 12月26日

1. わたしはどのように偉大な任務を果たすことにおいて自分の分をなす準備をすべきですか。
2. わたしはどのように真の信仰を育むことができますか。
3. マタイによる福音書 1:21 に言及されている救いとはわたしにとって何を意味しますか。
4. 真の信仰と偽りの信仰の間の違いを定義しなさい。
5. バプテスマは何を意味しますか。

第一安息日献金



安息日 10月4日

南アフリカのレト・ミッション
教育、伝道、文書がレトに届きます。
援助によってそれを実現しましょう！

(4 ページ参照)



安息日 11月1日

貧しい国のための文書

今日のための真理を印刷した出
版物は貴重です。わたしたちは
困窮している人々と、それらを
分かち合わなければなりません！
(25 ページ参照)



安息日 12月6日

「21M メディア・スタジオ改築

近年、非常に多くの伝道の働きが、電子
メディアに依存しています。できる最善
をつくしましょう。(46 ページ参照)